

ドヤのまち寿町

—外部からの介入者による地域変容メカニズム—

早稲田大学文化構想学部

社会構築論系 4年

浦野正樹ゼミナール（地域都市論）

1T080712-3

西上香織

目次

1章 研究目的及び執筆動機	2
1-1 研究目的	2
1-2 執筆動機	2
2章 研究方法及び論文構成	4
2-1 研究方法	4
2-2 論文構成	5
3章 寿町の概要及び歴史	7
3-1 寿町の概要	7
3-2 寿町の歴史	9
4章 周辺地域の変化	15
4-1 みなとみらい地区の発展	15
4-2 既存建築物を活かしたアート活動の活発化	17
5章 周辺地域の変化と寿町	20
5-1 みなとみらい地区の発展	20
5-2 山谷と寿町の比較	28
6章 周辺地域のアートによる地域再生まちづくりの影響	39
6-1 既存建築物を活用したアート活動の先行モデルの提示	39
6-2 黄金町と寿町の比較	40
7章 寿町の地域変容メカニズム	44
8章 寿町の変質	47
9章 総括	50
9-1 まとめ	50
9-2 本研究の意義及び展望	52
【参考文献】	53

1 章 研究目的及び執筆動機

1-1 研究目的

本稿の研究目的は、横浜市寿町で起こっている外部からの介入者による地域変容のメカニズムを解明し、寿町がどのように変質しているかを明らかにすることである。

寿町は、簡易宿泊所（ドヤ）が密集する日本三大ドヤ街の一つである。かつては日雇労働者のまちとして発展した地域だったが、現在は生活保護受給者が多く暮らしている福祉のまちになっている。隣接する華やかなみなとみらい地区とはまるで別世界の地域である。路上生活者であふれていた時期もあり、「ホームレスが多く危険なまち」というレッテルを張られていた寿町だが、近年、このまちを活性化させようとする新たな2つの取り組みが始まった。1つは、老朽化した簡易宿泊所を改装し、ホテル化する取り組みである。この取り組みは、2005年に建築家のO氏が「ヨコハマホテルヴィレッジ」を設立して始まったものである。ホテルの経営によって人の流れを変え、雇用を創出していくことで地域活性化をしていくことが狙いである。2つ目は、アートによる地域活性化の取り組みである。2008年より寿オルタナティブネットワークという団体がアーティストのレジデンスプロジェクトやアートのイベントの開催を行っている。ドヤのホテル化もアートによる地域活性化も外部からやってきた人々による取り組みである。こうした外部の人間による取り組みが始まったメカニズムは何なのだろうか。そして寿町は今どのように変質しているのだろうか。本稿では、こうした寿町の地域変容のメカニズムと、寿町の変質について明らかにしていく。なお、本稿は住民たちの生活実態の変容を研究するものではなく、外部と寿町の関係に焦点をあてるものである。周辺地域とは隔絶されていた寿町がどのようなメカニズムで外部からの介入を受容したのか、かつて周辺地域に対して日雇労働力を供給する役割を担っていた寿町が現在周辺地域との関係をどのように変化させているのか、ということが本稿の研究目的であることを強調しておきたい。

1-2 執筆動機

寿町で何が起きているのか。本論文の執筆動機はこの素朴な疑問にある。中学高校の6年間、私は寿町のすぐ近くの学校に通いながら一度も寿町に行ったことがなかった。ホームレスが多く治安が悪いという話を聞いたり、「あそこは危険だから近づいてはいけない」という注意を周囲から受けていたりしていたため、訪れる勇気も動機もなかったからである。しかし、最近寿町で外部からやってきた若者たちによって地域再生のプロジェクトが実行されているということを知り、私は非常に興味を持った。特に印象的だったのは、2010年に寿町で開催された「石川町うらっかわ市」という地域交流イベントである。インターネ

ットで記事を閲覧しただけだが、ファッションショーやまちあるきツアーなどが催され、危険なイメージの寿町とはかけ離れた様子には私は衝撃を受けた。寿町で一体何が起きているのか。調べていくうちに、こうした地域活性化の取り組みがヨコハマホステルヴィレッジなど外部からやってきた人々によって進められていることを知り、新たに次のような疑問を抱いた。なぜ外部の人間が関わっているのか。確かに、生活保護受給者と高齢者が住民の多数を占める寿町では、住民による地域再生は難しく、地域再生のために外部が関わることはやむを得ないことなのだろう。しかし、なぜ外部からの人間による地域再生の取り組みが行われるようになったのだろうか。そして寿町は外部の介入を受けてどのように変わっていったのだろうか。このような疑問を持ったため、横浜市寿町をとりあげ、その地域変容のメカニズムと地域の変質について研究することにした。

2 章 研究方法及び論文構成

2-1 研究方法

本稿では、シカゴ学派のバージェスの同心円理論と文化生態学の理論を参考にする。まず、同心円理論については、「遷移 (succession)」の概念を利用する。同心円理論では、都市の空間的パターンを 5 重の同心円によって示しており、寿町は、同心円理論における「遷移地帯 (zone in transition)」の定義に近い地域である。「遷移地帯 (zone in transition)」とは、スラムなど安価で劣悪な住宅地区を指し、都市の中心部である「中心業務地区 (Loop)」に隣接する。みなとみらいという横浜の中心に近く、ドヤが集積している寿町は「遷移地帯 (zone in transition)」にはほぼあてはまる地域といえる。そのため、寿町における地域変容は、同心円理論の「遷移 (succession)」、すなわち中心部から外側の地帯への「侵入 (invasion)」の過程における一つの現象であると考えられる。つまり、寿町は横浜の中心部の支配を強く受けて変容していると考えられる。よって、本稿は、寿町の地域変容のメカニズムを解明するために、寿町周辺部の変化に注目し、その変化と寿町の関係性を考察する。現在寿町周辺では、「みなとみらい地区の発展」と「既存建築物を活用したアート活動の活発化」が起きており、本稿ではこの 2 つの変化を取り上げることとする。なお、本稿は住民たちの生活実態の変容を研究するものではなく、あくまでも外部と寿町の関係に焦点をあてたものであるということを改めて強調しておく。

周辺地域の変化と寿町の関係性の分析については、文化生態学の手法を用いる。文化生態学は J・H・スチュワード (1902-1972) が確立した研究領域である。J・H・スチュワードは、文化生態学を「文化がその環境に適応する時どのような変化を伴うかを確かめるための、方法論的一手段」(米山俊直訳,1979,pp44) とし、「どんな文化—環境的情况にも適用できる一般原理を引き出すためではなく、異なる諸地域を特徴づける特殊な文化の特色やパターンの起源を説明するために探究するという点で、人間生態学や社会生態学と異なる」(米山俊直訳,1979,pp37) としている。J・H・スチュワードは、生業や技術、居住形態など、生存活動や経済活動に深く関わっている文化の特色を「文化の核」とし、文化パターンを分析する上で重要な要素と位置付け、分析の手順を次のように示した。第一の手順として、技術と環境の相互関係を分析する。第二に、特殊な技術による開発に伴う行動パターンを分析する。そして第三の手順として、環境の開発に伴う行動パターンが、文化の他の様相にどのように影響を及ぼすかを分析する。J・H・スチュワードは、北米先住民民族の文化の研究においてこの 3 つの手順による分析を行い、異なる諸地域の文化パターンを考察した。

本稿においては、この J・H・スチュワードが示した手法を次のように利用する。J・H・スチュワードの手法で示されている「環境の変化」を寿町周辺地域で起きている変化としてとらえることとする。また、J・H・スチュワードが示した手法のうち第二の手順で、「特殊な技術による開発に伴う行動パターンを分析する」としているが、該当する「特殊な技

術」が寿町にないため、「生生活動や経済活動に深く関わっている文化の特色」（すなわち「文化の核」）と広く捉えることにする。以上のようにして、寿町と類似した地域の比較分析を行う。まず、寿町と同じ日本三大ドヤ街の歴史を持つ山谷（東京）と寿町をそれぞれ上記 3 つの手順で分析し比較し共通項を抽出することで、ドヤ街で起きる特殊な文化パターンを明らかにする。同様に、寿町と同じようにアートによる地域再生の取り組みが行われている黄金町（横浜市）と 3 つの手順で比較分析する。さらに比較分析の際、共通項だけでなく、相違点も明らかにし、寿町で生じている特有のパターンを明らかにする。

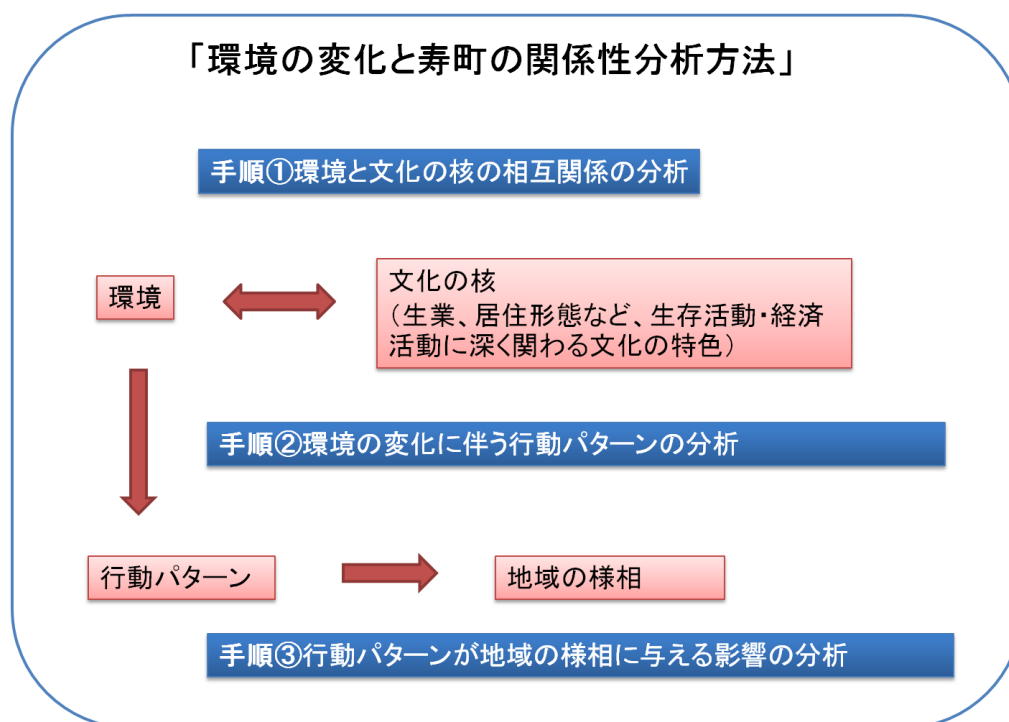


図 1 環境の変化と寿町の関係性分析方法

寿町に関する情報の収集は、先行研究の他、関係アクターへの取材を中心とする。具体的には次の方々へのインタビュー調査である。寿町のドヤのホステル化を行ったヨコハマホステルヴィレッジ設立者である O 氏、寿町でアート活動を推進している寿オルタナティブネットワークの T 氏と K 氏（総合プロデューサー）、住民への支援を行っている NPO 法人さなぎ達事務局長 S 氏、住民の生活支援を長年続けてきた寿支援者交流会事務局長 T 氏である。以上の方々へのインタビュー調査で得られた情報をもとに研究を進めていく。

2-2 論文構成

以上の研究方法を踏まえ、論文構成を以下のようにする。4 章では、周辺地域で起きている 2 つの変化「みなとみらい地区の発展」と「既存建築物を活用したアート活動の活発化」

を概観する。5章では、みなとみらい地区の発展と寿町の関係性を考察する。まず5-1で、寿町に影響を及ぼしたと考えられるみなとみらい地区の変化について詳しく分析する。5-2で山谷と寿町をJ・H・スチュワードが示した3つの手順で変容パターンを分析し、両者の比較を通じて、みなとみらい地区の発展と寿町の関係性を分析する。6章では、周辺地域で起こったアートによる地域再生まちづくりと寿町の関係性を分析する。まず6-1で、寿町に影響を及ぼしたと考えられるアート活動の動きとして黄金町の取り組みを考察する。6-2で、文化生態学の手法を用いて黄金町と寿町を分析し、両者の比較を通じて周辺地域の変化（アートによる地域再生まちづくり）と寿町の関係性を考察する。

5章6章で分析した結果を踏まえ、7章では、外部からの介入者による寿町の地域変容メカニズムをまとめる。そして8章では、寿町がどのように変質したかを考察する。最後に9章で総括する。

【論文構成】

1章 研究目的及び動機	
	1-1 研究目的
	1-2 動機
2章 研究方法及び論文構成	
	2-1 研究方法
	2-2 論文構成
3章 寿町の概要及び歴史	
	3-1 寿町の概要
	3-2 寿町の歴史
4章 周辺地域の変化	
	4-1 みなとみらい地区の発展
	4-2 既存建築物を活用したアート活動の活発化
5章 周辺地域の変化と寿町	
	5-1 みなとみらい地区の発展
	5-2 山谷と寿町の比較
6章 周辺地域のアートによる地域再生まちづくりの影響	
	6-1 既存建築物を活用したアート活動の先行モデルの提示
	6-2 黄金町との比較
7章 寿町の地域変容メカニズム	
8章 寿町の変質	
9章 総括	
	9-1 まとめ
	9-2 本研究の意義と展望
【参考文献】	

3 章 寿町の概要及び歴史

3-1 寿町の概要

寿町は、JR 根岸線石川町駅北口から徒歩 5 分の位置にある面積 0.06km²の小さなまちである。横浜中華街やランドマークタワー、山下公園、赤レンガ倉庫などの観光スポットが集中するみなとみらい地区が徒歩圏内にある。このように寿町はみなとみらい地区と隣接するまちなのだが、華やかなみなとみらい地区とは全く対照的である。足を踏み入れると、そこには 120 軒ものドヤ（簡易宿泊所）が密集して建っている。ドヤが密集している地域として有名であり、東京の山谷（台東・荒川区）、大阪の釜ヶ崎とあわせて「日本三大ドヤ街」と呼ばれている。ドヤという呼び名は、「宿（やど）」を「人が住むところではない」と自嘲的に「ドヤ」と呼んだのが始まりと言われている。1 室 3 畳の安価な宿泊施設であり、利用者の大半は低所得の寿町の住民である。寿町の住民は約 6500 人で、そのうち 8 割が生活保護受給者であり、生活保護費でドヤ代を払っている。高齢者（60 歳以上）の人口は全体の約半数を占めており、超高齢化社会である。

寿町が日本三大ドヤ街と呼ばれるほど簡易宿泊所（ドヤ）が密集している背景には、「寄せ場」としての寿町の歴史がある。「寄せ場」とは日雇労働者の自由労働市場（職業あっせんを行う場所、主に港湾・建設業の職業あっせん）のことである。高度経済成長期には、日雇労働者のまちである寿町は主要な労働力供給地となり、全国から多くの単身労働者が日雇労働者として寿町に流入し、多いときには 8000 人以上の労働者でにぎわったという。しかし、高度経済成長の終焉をむかえ、日雇労働市場が縮小すると、寿町は生活保護受給者や高齢者が多く住む「福祉のまち」へと変化した。生活保護受給者や高齢者ばかりのまちには活気がない。道端で寝る人々、不法投棄のごみの山など、暗く陰鬱なイメージが定着した。

次の図 2 の赤い枠の内側が寿町である。石川町駅から近く、非常に狭いエリアであることがわかる。図 3 は、寿町とみなとみらい地区との位置関係を示している。横浜の最大の観光スポットみなとみらいと近いことがわかる。



図 2 寿町地図



図 3 寿町・みなとみらい地区の位置関係

3-2 寿町の歴史

(1) 寄せ場の寿町

寿町はもともと問屋や小規模な商店が立ち並ぶ下町的情緒を帯びた地域だったが、第二次世界大戦後、寿町を含む「埋地七ヶ町」一帯が米軍に接収され、旧来の住民は移住していった。

同じ頃、戦後援助物資の国内受け入れ港となった横浜港に全国から労働者が集中し、荷役や清掃などの港湾労働に従事する人々が急増した。その結果、生活インフラ整備が追いつかず、桜木町・野毛地域にスラム街が形成された。

1956年、「埋地七ヶ町」の米軍による接収が解除されると同時に、桜木町・野毛地域のスラムクリアランスが行われ、スラム住民のうち家族は公営住宅へ、単身男性は寿町へ移住した。単身男性が寿町に向かったのは、寿町で在日韓国人らが接収解除後の空き地を利用して簡易宿泊所が建て始めていたためである。

1957年に職業安定所が寿町に移転したため、寿町に住む日雇労働者が急増し、以後寿町は日雇労働者のまちとして発展する。これが、寿町の「寄せ場」としての歴史の始まりである。

(2) 高度経済成長と寿町

高度経済成長期の横浜では重化学工業を中心とする工業化を進める政策が次々と打ちだされていった。これは平沼市長（任期 1951－1959）と半井市長（任期 1959－1963）が保守勢力を支持基盤とし、中央との結びつきの強い市政を行っていたことが背景にある。高度経済成長を促進させる政府の政策に歩調をあわせる方針がとられ、地域住民の生活環境よりも開発が優先された。まず、1956年に政府が策定した「経済自立五カ年計画」に基づき「横浜港湾計画」が成立し、港湾整備計画が拡充された。さらに「港湾施設の拡充計画」、「臨海工業地帯造成計画」が策定され、埋め立ての推進、工業用水道の整備など産業基盤整備が急速にすすめられた。その結果、横浜市の工業生産額は、1955年を基準にして1959年には2倍、1965年には5倍、1973年には10倍にも達した。

この急速な産業基盤整備は日雇労働に対する大きなニーズを生んだ。日雇労働者は安価で調整がききやすいからである。日雇労働者のまちである寿町は主要な労働力供給地となり、全国から多くの単身労働者が日雇労働者として寿町に流入し、多いときには8000人以上の労働者でにぎわったという。現場業者から求人を請け負った手配師たちが早朝に寄せ場に現れ、日雇労働者を連れて現場に向かう姿が毎日のように見られた。こうして高度経済成長は寿町の「寄せ場」としての役割を増大させ、大量の日雇労働者の流入を招いたのである。

野本三吉著『風の自叙伝—横浜・寿町の日雇労働者たち』（1996）では寄せ場全盛期の寿町について次のような描写がある。当時、寿町が日雇労働者のまちとしていかににぎわっ

ていたかが伝わってくる。

その頃の寄せ場は、高度経済成長期からややかげりが見えたとはいうものの、実に活気があった。船舶の荷運びも多かったし、建設作業も多かった。寿の町は、朝早くから行きかう労働者の熱気と、迎えに来ている企業の車や、手配師の呼び声などで、エネルギーに満ち満ちていた。仕事は余るほどあったし、昼夜つづけてやる二分通しなどもごく当然のこゝろのように行われていたのであった。

そんななかで、勘ちゃんはキリリッとねじり鉢巻きをしめ、屋台の朝メシをかつこむと、港にむかってスタスタと歩いていくのであった。

やはり、日雇労働者のなかでも、上肩という職種は、一つの花形的存在でもあったのだろう。港の仕事をする男たちは、かなりきつい労働なので気性も荒っぽくなり、体も丈夫でなければつとまらなかった。

(野本三吉,1996、pp40)

(3)福祉のまちへ

寄せ場のまちとして発展していった寿町だが、寿町が福祉のまちへと変貌していく兆候は高度経済成長期のときからあった。寄せ場の機能が急拡大するにつれ、労働環境や生活環境の悪化が急速に進んだためである。日雇労働者は低賃金で各種保険に加入できない場合が多く、無保険状態で過酷な労働状況に置かれた。重層的な下請け制度によって日雇労働者の労働に関する業者の責任があいまいになり、これを利用して労働災害の責任逃れをしたり「追いまわし」をしたりする悪質な業者もいた。「追いまわし」とは、現場監督らが契約の期限が近づくとわざと暴力をふるい労働者が逃亡するように仕向け、賃金の支払いを逃れようとする行為である。寿町の住民の多くはこのような劣悪な労働環境に苦しむこととなった。また、急速な人口集中は生活環境を悪化させた。急速な人口集中は住居の不足、下水道・道路の整備の遅れを伴うためである。このように寿町の住民の労働環境と生活環境はともに劣悪だった。

以上のような寿町住民の労働・生活環境の悪化をうけ、横浜市は1961年に寿町の環境整備と福祉政策を推進するため「埋地七カ町環境整備協議会」を設置した。翌年には中民生安定所による夜間出張相談が行われることになり、多くの住民が週に1度生活相談に訪れた。さらに1965年には、生活相談・児童相談・健康相談を基本業務とする「寿生活館」を開館した。労働・生活環境の悪化を解決する第一歩としての相談業務が高度経済成長期の段階から開始されたのである。住民の労働・生活環境の急速な悪化によって福祉政策が寿町で整えられ始めることになったといえることができるだろう。

高度経済成長の終わりは寿町にとって大きな転機だった。1973年のオイルショック以降、日雇労働者の仕事は激減し、寄せ場として役割を失っていった。その後、横浜市ではウオ

一ターフロントの再開発事業「みなとみらい21事業」が計画され、1983年に事業が着工されたものの、日雇労働市場は縮小を続けた。これは建設現場における作業過程の機械化、技能の合理化が進んだためである。日雇労働者の多くが担っていた単純作業が機械化と技能の合理化によって減少し、現場で必要とされる労働力のうち熟練工など技術を有する労働者の占める割合が大きくなった。こうした労働市場の構造的な変化は、寿町の寄せ場としての役割を喪失させてしまった。

さらに1970年代後半から1980年代は、高度経済成長期に全国から大量に集まった日雇労働者が高齢化する時期にあたり、寿町の高齢化が急速に進んだ。

日雇労働市場の冷え込みによる仕事の激減と高齢化で働けなくなった人々の増加によって寿町的生活保護受給者は増加した。また、横浜市が寿町の簡易宿泊所に住所をおき、そこに居住する人々に対して生活保護の受給を認める政策をとったため、他地域からの貧困層の人口流入が起き、このことも生活保護受給者の増加を招いた。

このように、高齢化が進み、生活保護受給者の数も増加した寿町は「日雇労働者のまち」から「福祉ニーズの高いまち」へと変貌していった。

こうしたまちの変化について野本三吉著『風の自叙伝—横浜・寿町の日雇労働者たち』(1996)では次のように描かれている。

寿町の人口は約五千人。最盛期の一九六〇年前後には、一万人を超えていた。狭いこの地区に一万人の人口では、早朝の寄せ場は、労働者と労働者が体をこすりあうようにして動かねばならないほどであった。

しかし、一九七五年の不況を越えて、町の様子も大きく変わってきた。日雇労働者の町であることに違いないが、以前ほどの活気も活力も今はない。どこか疲れた巨大な施設に思えるのである。六十歳以上の老人が増えた。労災事故などで体をこわし、身体障害者となった労働者の数も多くなった。

アルコール中毒や結核、肝臓やヘルニアで労働がきつくなった人も多い。生活保護受給者は総人口の四割を占める。

(野本三吉,1996、pp223)

(4) 寿町における福祉政策

以前から福祉政策が行われてきた寿町だが、オイルショックを契機とする寿町の変容は、寿町における横浜市の福祉政策の充実をさらに促した。1983年には寿地区対策協議会が設置され、その中の福祉対策部会で緊急一時宿泊所の運営などの福祉政策が打ち出されていた。さらに、2003年に「ホームレス自立支援施設はまかぜ」が設立された。「ホームレス自立支援施設はまかぜ」は、ホームレスに一時的な宿泊場所を無料で提供し、生活指導や

就労支援を行う福祉施設である。これによって寿町は、日雇労働者やホームレスの保護だけでなく、「自立支援」を行う場としての役割を担うようになった。また、高齢化で介護サービスを必要とする人々や、アルコール依存症・結核などを抱える人々への支援のニーズが高まったため、2004年に「寿福祉プラザ相談室」が設立され、高齢障害やアルコール依存症、結核への対応といったよりきめ細やかなサポート体制が作られた。福祉政策が充実するにつれ、その対象は拡大し細分化されていったのである。

オイルショック後の寿町の変容は市の福祉政策の充実を促し、福祉政策の充実是他地域からの野宿者などの人口流入を招き、このことは福祉政策の対象の拡大と政策内容の変化を促した。寿町は自身の変容と社会変動、市の福祉政策の変化によって、役割を微妙に変化させながら横浜における貧困層の問題の受け皿となっていったことができる。

(5) 寿町の現在

寿町は「日雇労働者のまち」「ホームレスのまち」として知られ、危険で暗いというイメージが定着しているが、取材をしてみると、そこにはイメージとは違う寿町の姿があった。確かに1980年代は高齢化した日雇労働者が住民の大半を占めていたそうだが、現在は1990年代から流入した失業者が大半を占めているという。不況で失業し住居を失って野宿を経験したのち、生活保護を受けて寿町の簡易宿泊所に住むようになったという住民が多いようである。また、彼らの中には他人には言えない過去を持ち、行き場を失った末に寿町にやってきたという人々や、家族に縁を切られ身寄りがなくなってやってきた人々など、さまざまな事情を持つ住民がいる。本名を名乗りたがらず、まわりに出身地名で呼ばせる人もいう。このように、さまざまな事情を抱える住民が集まっているのが寿町の姿である。

路上生活者があふれていた時期もあり、「ホームレスのまち」というイメージが定着していた寿町だが、現在寿町には路上生活者はほとんどいない。住民の8割は生活保護受給者であり、保護費で1泊2000円前後の簡易宿泊所で寝泊まりしている路上で座り込んでいる人々の多くは、野宿しているからではなく、1室3畳の簡易宿泊所が日中過ぎすには少々狭いからである。寿労働センターや飲食店のまわりには、数人でかたまって座っている住民を多くみかけたが、彼らは日中することがなく部屋も狭いため外へ出て友人と話すために路上にいるのだという。

「危険」というイメージも定着していたが、近年はそれほどでもなくなっている。以前は血気盛んな男性たちが喧嘩をすることも多く、治安も悪かったが、近年治安は良くなってきている。寿町で滞在・創作している女性のアーティストの一人は、「1年前と比べてみても女性が歩きやすい雰囲気になってきている」と言っていた。彼女によると、住民が高齢化したことや福祉職の女性の往来が増えたこと、住民自身が外部の人間に慣れ始めたことがあるようである。

また、貧困層が多く住んでいるということで貧困問題が深刻になっていると思われがちだ

が、実際には、生活水準は低いものの、以上に述べたように生活保護費で住居は確保できるし、行政による福祉サービスや市民団体等による生活支援によって住民たちの生活はある程度保証されている。例えば、毎週金曜日には、寿公園でボランティアによる炊き出しが行われている。私も取材した際に炊き出しの様子を見たが、野菜が入った温かい雑炊とバナナがふるまわれており、希望者にはおかわりもできるほど十分な量が用意されていた。私自身も許可を得て雑炊をもらったが、野菜が豊富に入っておりとてもおいしかった。また、近くのベンチには、寿支援者交流会事務局のスタッフが生活相談を受け付けており、住民へのきめ細やかな生活支援が行われているようであった。この炊き出し以外にも、キリスト教の教会関係者による生活支援なども行われており、支援者は多いようである。

住環境も、近年ドヤの建て替えが進み、改善が進んでいる。マンションのような外観も増え、ドヤとはとても思えないようなものが寿町のあちこちに建ち始めている。高齢化した住民のためにエレベーターを設置したドヤも増え始め、バリアフリー化が進んでいる。外観が古いドヤでも内部で改装が行われるケースが増えている。例えば、ダニの発生を防ぐため、畳からフローリングに改装するドヤのオーナーもいるという。

もちろん問題がないわけではない。寿支援者交流会事務局によると、支援からもれている住民や受けられる福祉サービスを受けていない住民もいるようである。また、アルコール依存症やその他精神的な疾患など食糧や生活物資以外の面で支援の必要な住民も近年は多いという。さらに最近では孤独死の問題が深刻化しているという。もともと独身男性が多かったため、超高齢化が進み、誰にも看取られずに3畳のドヤの一室で孤独死をする住民が近年非常に増えているのである。

ここで、寿町で活動する人物による現場の声を紹介し、寿町の現在を描写する。以下季刊誌「横濱」(2010年秋号)に掲載されていた医師のY氏へのインタビュー記事である。高齢化した寿町の住民にとって医療は暮らしと密接にかかわってくる分野であり、Y氏の話は、現在の寿町の住民の現状を伝える生の声といえる。

現在、寿地区に百二十軒ほどの簡易宿泊所があり、約六五〇〇人の人が入っている。その六〇%が六十歳以上だ。さらにそのうちの九四%が生活保護受給者である。

「寿地区は、怖い場所だと言われていましたよね。血気盛んな男たちが集まっていたんだから、いろいろなトラブルもあったでしょう。でもいまは弱者のまちです。家族がいても、縁切り状態になっている高齢者、若くても、やはり家族の保護がない身体障害者。そういう人がほとんどです。ホームレスならぬファミリーレスの集まりです。」

この地区の人たちを診療する「ポーラのクリニック」院長、Yさんはそう言う。六年前、彼はこの診療所を開設し、治療と看取りを続けてきた。

「この五年間でいえば、病院へ搬送して、そこで亡くなった人が七十二人、僕が最

期を看取って死亡診断書を書いた人が三十二人、部屋でひっそり亡くなっていた人が二十三人、どこかへ消えてしまった人が四人いましたね。これは、なんらかのかたちで、うちのクリニックに関わった人たちですよ。寿町全体でいえば、年間一〇〇人から一五〇人の人が誰にも看取られずに孤独死してます。その平均は六十三歳です。」

ファミリーレスだから、危篤の際も、亡くなってからも、家族と連絡がとれないケースが珍しくない。「うちに関係ありません。そちらで何とかしてください」と遺体との対面すら拒否する家族もいる。高齢化社会、孤独死といった日本の縮図が、寿町には早くからあったのである。

「もはや死が避けられない人に、『良い死』を迎えさせてあげることも医師の仕事だと思う。雑な仕事で死なせるんじゃない、いい仕事をして見送るのです。」

長いこと孤独に耐えて生きてきた人も、死を目の前にすると人恋しくなる。誰かそばにいてほしいと渴望する。死期を悟った野生の獣は、仲間から離れ、隠れた場所でひっそりと死を待つというが、人間の場合は逆らしい。Y院長は寿でまざまざとそれを見てきた。

「ファミリーレスだからこそ、心安らかに死を迎えられるような体制が必要だと思いました。自分を見守ってくれてる人がいる、心配しなくてもいい、怖がらなくていいんだ、という安心感とともに死んでいけるように…」

(山崎洋子 2010,pp67)

Y氏へのインタビュー記事からは、寿町の住民にとって最大の問題が「死期までどのように生きるか」「死をどのように迎えるか」ということになっていることがうかがえる。高齢化した単身男性が大半を占め、兄弟姉妹や親戚と絶縁状態の人が多い寿町において、住民の直面している最も重大な問題が労働問題や貧困からこうした死期までの問題に移行していることがわかる。

4 章 周辺地域の変化

4-1 みなとみらい地区の発展

近年起こった寿町の周辺地域の変化として、みなとみらいの再開発を取り上げる。ここでは、みなとみらい 21 事業の背景とその概要を述べる。

(1) みなとみらい 21 事業以前の状況

横浜都心臨海部（現みなとみらい 21 地区）は、横浜港の奥に位置し、次の 6 つの地区からなっていた。（図 4 参照）

新港埠頭地区は 1899 年から造成され、1917 年に整備が完了した。それ以来横浜港の中心的な役割を担ってきたが、施設が老朽化し、船舶や貨物の大型化に対応しきれなくなっていた。東横浜駅地区は、現在の桜木町のある地区である。鉄道発祥の地で、東横浜駅は貨物駅として機能していたが、新貨物駅にその機能が移ってからは信号所として機能していた。三菱ドック地区は、1891 年にドックが建設された地区である。戦後、市街地に囲まれていることから、機能の拡充が難しくなり、1969 年から移転交渉が始まった。高島埠頭地区は、昭和初期に整備され、戦後に機能を拡充した。主に海外貿易の埠頭として利用されていたが、年々取扱貨物量が減っていた。高島ヤード地区は、明治末期から埋め立てが開始され、鉄道貨物駅及び操車場として機能していた。京浜工業地帯の輸送拠点の 1 つだったが、高度経済成長期はトラック輸送に押されていた。横浜東口地区は、資材置き場として大正と戦後に横浜市によって埋め立てが行われた。近年は駅前が開発が進んでいた。



図 4 1982 年当時のみなとみらい地区（高橋正宏,2002,pp16）

(2)みなとみらい 21 事業

「みなとみらい 21 事業」とは、1980 年代に始まった横浜市の都心部ウォーターフロント再開発事業のことである。「みなとみらい 21 事業」のねらいは、開港以来の都心である関内・伊勢崎町地区と、高度経済成長期から急速に発展した横浜駅周辺地区の一体化と再整備にある。低下していた横浜都心臨海部の港湾機能を停止・移転し、跡地に都市機能を集積させることによって、二つの都心を一体化・強化させる事業である。

「みなとみらい 21 事業」は、もともとは 1965 年に横浜市が発表した六大事業の一環として立ち上げられたプロジェクトである。「六大事業」とは、①都心部強化事業 ②港北ニュータウン建設事業 ③金沢地先埋立事業 ④高速鉄道（地下鉄）建設事業 ⑤高速道路網建設事業 ⑥ベイブリッジ建設事業 の 6 つの事業を総称したものである。このうち①都心部強化事業の中核的プロジェクトが「みなとみらい 21 事業」なのである。

六大事業が発表された背景には、次のような戦後の横浜の歴史がある。戦争で焼け野原となった横浜の中心部は、戦後も米軍に接収されたため、計画的な復興と再整備ができずにいた。その間に東京に商社などの業務機能が流失し東京への一極集中が進んだ。一方、郊外部では無秩序な宅地開発が急速に進み、「横浜都民」とよばれる市民が急増した。また、横浜駅周辺が郊外部と結ぶ鉄道の結節点として急速に繁華街化し、都心が開港以来の関内・伊勢崎町地区と二分された状態になっていた。さらに、横浜都心臨海部の港湾機能の低下が著しくなっていた。

横浜市は、このような状況を打開し、自立都市を目指すために 1965 年に「六大事業」を発表した。このうちの都心部強化事業の中核的プロジェクトが「みなとみらい 21 事業」であり、1981 年に基本計画が策定され、1983 年に着工した。

みなとみらい 21 事業では、美しい景観の形成が重視され、全国で初めて都市デザイン手法が取り入れられた。都市デザイン手法のもと、1991 年にパシフィコ横浜（横浜国際平和会議場）、1993 年にホテル・オフィス・ショッピングモールからなる複合施設「ランドマークタワー」、1997 年にホテル・オフィス・コンサートホール・ショッピングモールで構成される複合施設「クイーンズスクウェア」が完成し、統一感のある近代的な都市空間が形成された。また、同時に歴史的建築物を活かした景観形成も進められた。明治時代の終わりに港湾施設として建てられた赤レンガ倉庫を活用し、2002 年に赤レンガパークをオープンさせるなど、歴史的建築物と近代的建築物が共存する街並みが作られた。臨港パークやグランモール公園、運河パークなど、緑地が整備され、それらをつなぐようにプロムナード等が整備された。

こうして、横浜臨海都心部が担っていた大規模物流港湾の機能は、大黒、本牧、南本牧に移され、横浜臨海都心部はオフィスや商業施設、緑地の集積する新しい横浜の都心に生まれ変わったのである。

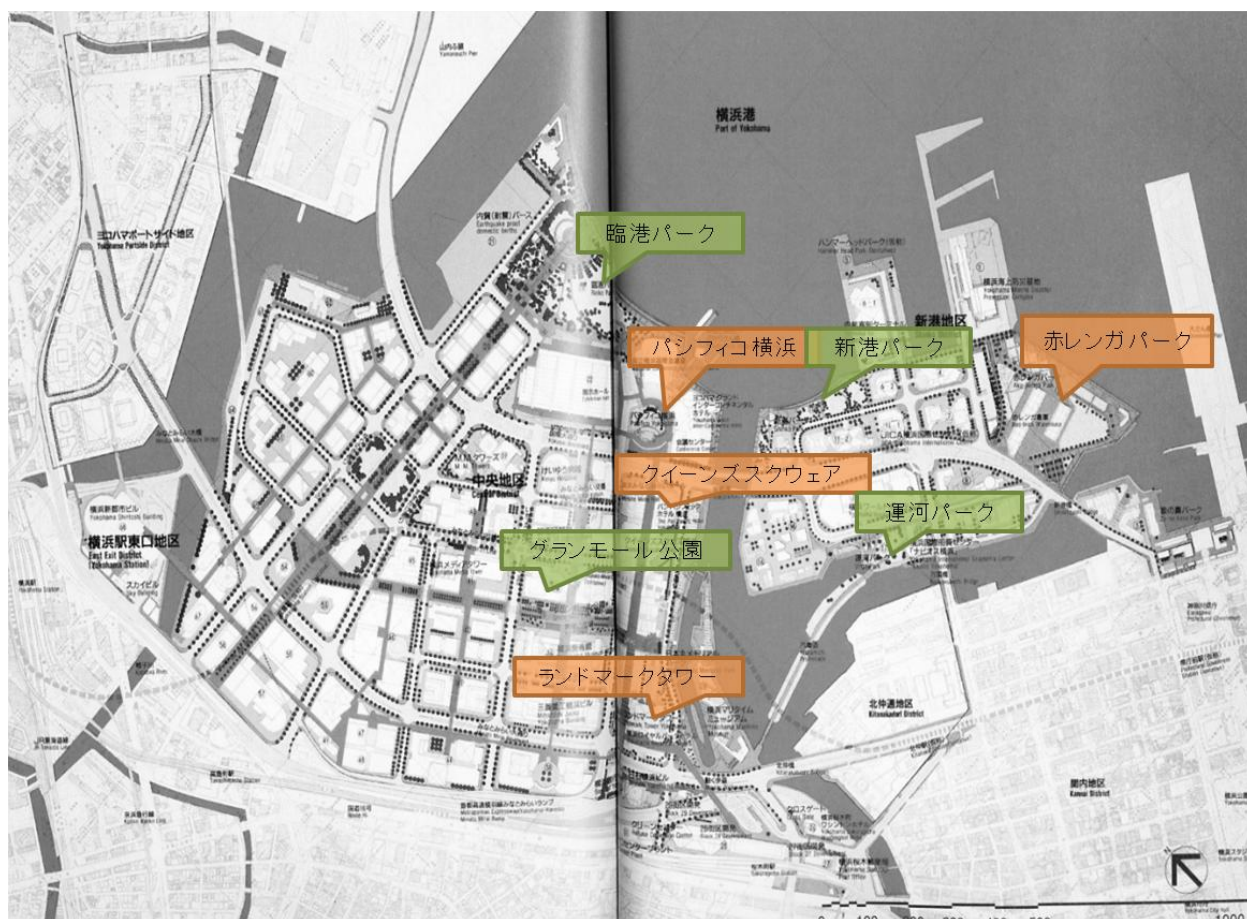


図 5 みなとみらい 21 事業

(高橋正宏『横浜みなとみらい 21 創造実験都市』2002, pp36-37, 「マスタープラン」より)

4-2 既存建築物を活かしたアート活動の活発化

寿町周辺の桜木町・野毛地区、日本大通り地区、馬車道地区の 3 つのエリアでは、歴史的建築物や倉庫、空きオフィスを活用して、アーティストやクリエイターが創作、発表、滞在する環境を形成し、地域の活性化を図る取り組みが進められている。こうしたアート活動の活発化の背景には、1970 年代から続く「歴史を生かしたまちづくり」の流れとみなとみらい地区周辺の衰退がある。

横浜市では、みなとみらい 21 事業の計画に着手した 1970 年代より、個性ある都市空間の形成を目指して都市デザイン活動を開始した。個性ある都市空間の形成のため、横浜の歴史を生かしたまちづくりを目指すことになり、歴史的建築物の保存活用が開始された。その結果、赤レンガ倉庫や山手地区の西洋館など数々の歴史的建築物が保存活用されるようになった。そして 2000 年代に入って始まったのが歴史的資産の民間による効果的な活用実験 Bankart 事業である。Bankart 事業とは、旧第一銀行と旧富士銀行を新たな芸術活動の拠点とし、その運営を民間に委託して地域活性化を図る取り組みである。2004 年に BankART1929Yokohama (旧第一銀行)、BankART1929 馬車道 (旧富士銀行) が完成し、

2005年にはBankART StudioNYK（旧日本郵船倉庫）が完成した。これらは、アーティストたちが活動できるスタジオや宿泊できる設備、展示やイベントのためのスペースが備えられており、アーティストやクリエイターに創作、発表、滞在する環境を提供している。2006年には黄金町で古い木造建築を改修したBankART 桜荘がオープンし、歴史的建築物ではない既存建築物を活用も開始された。

「歴史的建築物を保存活用する取り組み」が「芸術活動の拠点としての活用」へとシフトしていった要因には、みなとみらい周辺地域の衰退がある。1990年代にみなとみらい地区が着々と発展を遂げる一方で、みなとみらい地区周辺では経済的な地盤沈下が起こっていた。こうした地盤沈下を食い止めるため、文化芸術を起爆剤とした地域活性化が目指されるようになり、歴史的建築物を芸術活動拠点として活用する取り組みにつながった。



図 6 クリエイティブシティヨコハママップ（横浜市文化観光局 HP）

図 6 は、横浜市の政策である「クリエイティブシティヨコハマ」のパンフレットに掲載されているマップである。クリエイティブシティヨコハマとは、文化芸術、経済の振興と横浜らしい魅力的な都市空間の形成をめざす横浜の新しい都市政策である。クリエイティブシティヨコハマでは、「ナショナルアートパーク構想」、「創造界限の形成」、「映像文化都市」、「横浜トリエンナーレ」の 4 つのプロジェクトからなっている。先に述べた Bankart 事業は、「創造界限の形成」の事業の一つにあたる。BankART1929Yokohama（旧第一銀行）、BankART1929 馬車道（旧富士銀行）、BankART StudioNYK（旧日本郵船倉庫）は、図 6 のマップの馬車道エリアに含まれる。黄金町の BankART 桜荘は、マップの桜木町・野毛エリアに含まれる。

5章 周辺地域の変化と寿町

ここでは、4章で述べた寿町周辺の変化と寿町の関係性について考察する。

5-1 みなとみらい地区の発展

(1) みなとみらい 21 事業の影響

みなとみらい 21 事業によってみなとみらい地区がどのように変化したかを述べる。その上で、みなとみらい地区の変化が寿町にとってどのような意味を持つのかを考察する。

具体的には、まずみなとみらい 21 事業の特徴を 3 つ指摘し、それらがどのような成果をあげたかを述べる。これらを踏まえ、みなとみらい地区がどのように発展したかを考察していく。

① 特徴 1 「まちを訪れる人の視点を重視」

みなとみらい 21 事業では、まちを訪れる人の視点が重視された。まず、3つのモールが都市軸として設定され、歩行者空間を重視した開発が行われた。人の集散拠点である横浜駅から海にまっすぐ向かう「キング軸」、桜木町駅から海にまっすぐ向かう「クイーン軸」、中央部で 2 つの軸をつなぐ「グランモール軸」である。(図 7 参照)これら 3 つのモールによって歩行者空間が確保され、まちを訪れる人にとって歩きやすいまちとなった。

また、みなとみらい 21 事業では、都市デザインの手法を導入した都市景観の形成が行われた。自治体による都市デザインの導入は全国で初めての試みである。都市デザインは、都市で生活・活動する人々にとっての空間や、地域独自の魅力ある空間を創出していくものであり、それまでそのような視点を取り入れた都市計画はなかった。みなとみらい 21 事業における都市デザインの手法の導入例として、スカイラインがあげられる。スカイラインとは、都市の高層建築物が描く輪郭線である。みなとみらい地区のスカイラインは、計画的に高層建築物を配置することによって内陸から海に向かって徐々に街並みが低くなるように設定された。これによって海に向かって解放感のある街並みを形成することができた。こうした都市デザインの手法を取り入れたことによって、訪れる人が美しい街並みを楽しめる都市となった。

②特徴 2 「シンボリックな施設の早期建設」

みなとみらい 21 事業では、文化施設やコンベンション施設などシンボリックな施設が早期に建設された。通常、文化施設等シンボリックな施設は、まちが成熟してから建設されることが多い。しかし、みなとみらい 21 事業では、シンボリックな施設である「横浜美術館」「横浜マリタイムミュージアム」国際会議場を含む「パシフィコ横浜」をあえて他の施設に先行して整備した。シンボリックな施設を早期に建設したことで話題をよび、開

発の初期段階からみなとみらい地区への関心が高まった。

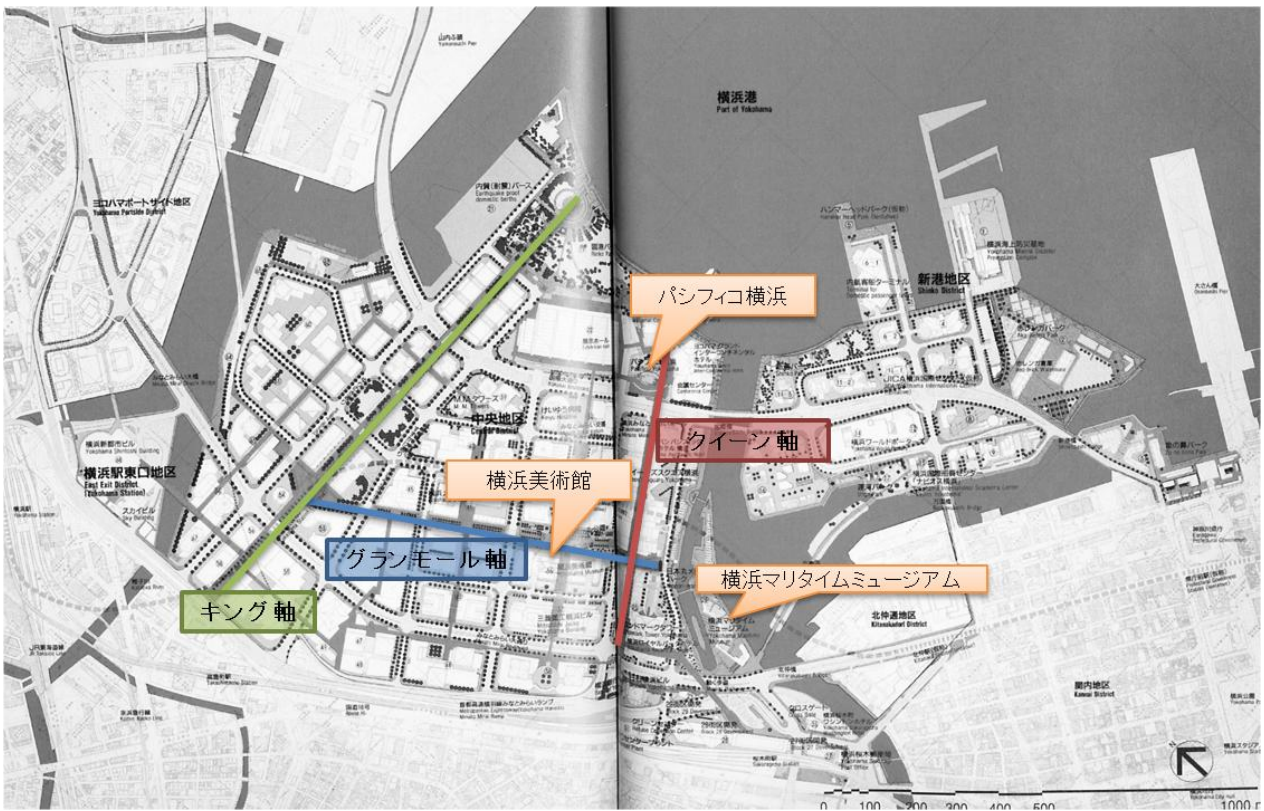


図 7 みなとみらい地区の都市軸およびシンボル施設

(高橋正宏『横浜みなとみらい 21 創造実験都市』2002, pp36-37, 「マスタープラン」より)

③特徴 3「横浜博覧会による PR」

1989 年、開発途中にあったみなとみらい地区で横浜博覧会が開催された。当初横浜博覧会は、開港 130 周年を祝うイベントとして企画されていた。しかし、その後みなとみらい 21 事業の PR イベントとしての性格が加わり、埋立工事が完了したばかりのみなとみらい地区に突貫工事で会場が整備された。このとき、現在の桜木町駅前広場やみなとみらい大通り、動く歩道、臨港パーク、グランモール公園、日本丸メモリアルパークが整備され、博覧会の会場の一部となった。

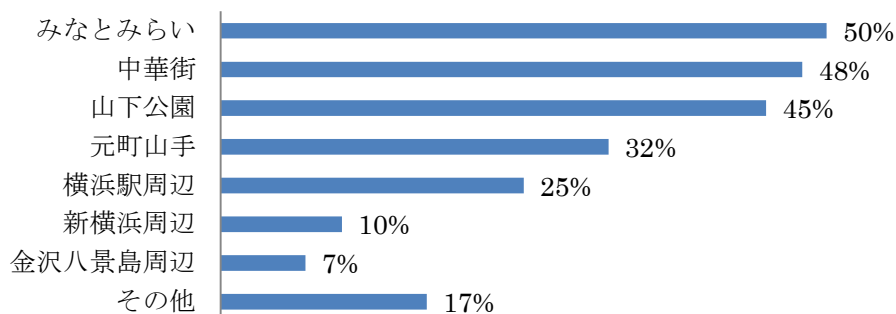
横浜博覧会は予想を上回る 1330 万人が訪れ、みなとみらい 21 事業の PR イベントとして成功を収めた。このように、開発途中から大規模なイベントを通じて一般に公開するという PR 戦略がとられたことで、市内外からのみなとみらい地区への注目は一層高まることとなった。

④成果

以上の 3 つの特徴より、みなとみらい 21 事業は、横浜の集客力の強化を特に意識し

た事業であったといえる。その成果は観光客満足度調査結果¹ や観光客数の推移に見ることができる。

【観光客の立ち寄り先】



グラフ 1 立ち寄り先（複数回答）

（『横浜市観光交流推進計画 改訂版』2007「横浜市観光客満足度等調査結果」をもとに作成）

横浜を訪れる観光客の半数がみなとみらい地区に立ち寄っており、みなとみらい地区の集客力の高さが表れている。

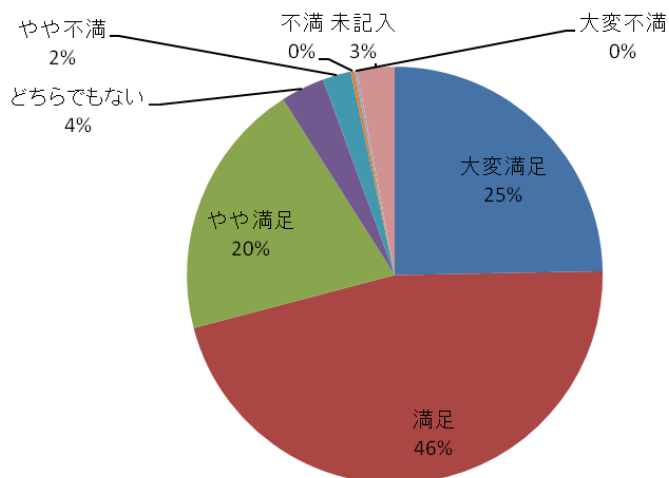
¹ 「横浜市観光客満足度等調査」

調査期間：2004年11月～2005年2月

調査方法：市内全域で来訪者への調査票の配布、郵送・インターネットによる回収

回収数：2537件

【観光客による評価】



グラフ 2 観光客の満足度

(『横浜市観光交流推進計画 改訂版』2007「横浜市観光客満足度等調査結果」をもとに作成)

表1 観光客の評価点

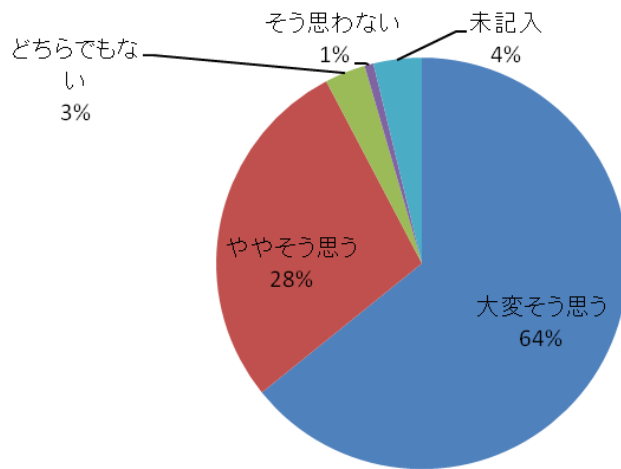
評価項目	景観	食事買い物	移動	店員対応	案内表示	観光施設	宿泊施設
評価点	88.2	83.3	74.9	77.8	74.4	80.3	83.2

横浜市観光客満足度等調査結果より
 (『横浜市観光交流推進計画 改訂版』)

以上のグラフ 2「観光客の満足度」より「大変満足」「満足」と回答した観光客が約半数を占めており、横浜を訪れる観光客の満足度の高さがうかがえる。また、表 1「観光客の評価点」より、景観に対する評価が最も高かったことから、都市デザイン手法をはじめとする景観形成の成果が出ていると考えられる。

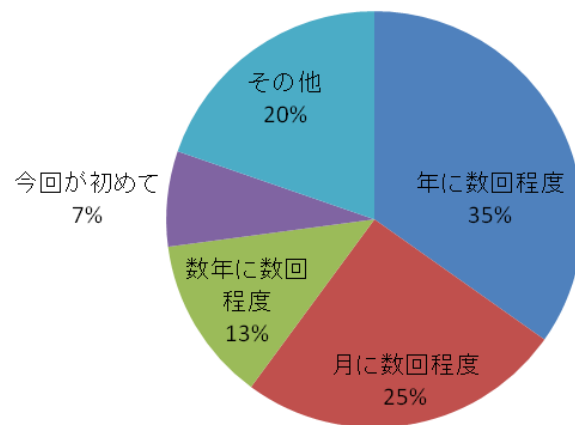
【観光客の再来訪意識・来訪頻度】

以下のグラフ 3 の「再来訪意識」やグラフ 4 の「来訪頻度」より、リピーターが多いことがわかる。多くの観光客が「また横浜に訪れたい」と思い、実際に 9 割以上が繰り返し訪れている。



グラフ 3 再来訪意識

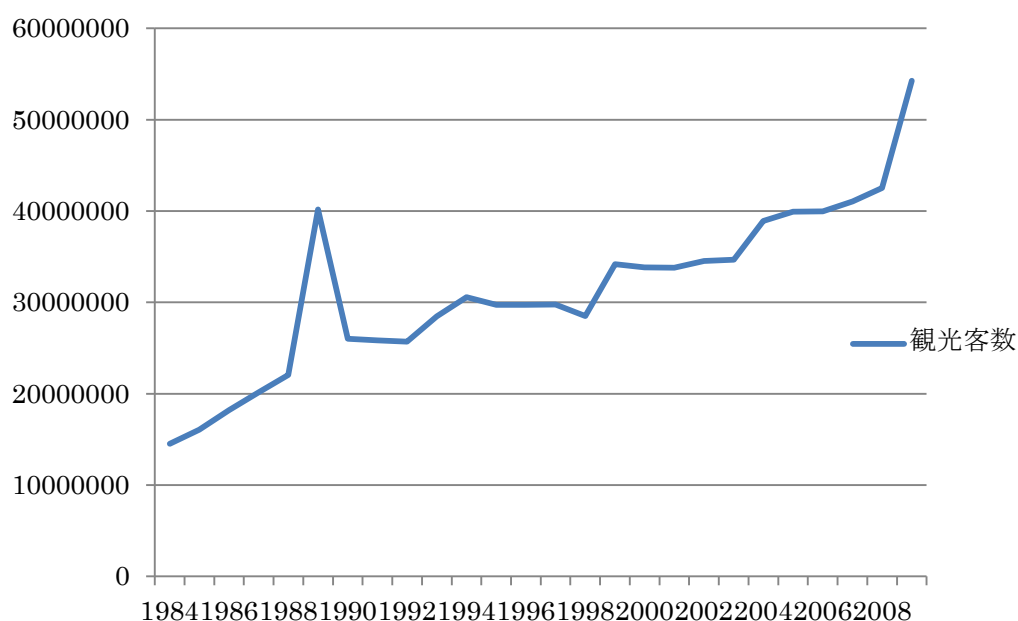
(『横浜市観光交流推進計画 改訂版』2007「横浜市観光客満足度等調査結果」をもとに作成)



グラフ 4 来訪頻度

(『横浜市観光交流推進計画 改訂版』2007「横浜市観光客満足度等調査結果」をもとに作成)

【観光客数推移】



グラフ 5 横浜市観光客数推移

(横浜市統計書 平成元年～平成 22 年度 をもとに作成)

横浜博覧会（開港 130 周年記念事業）が開催された 1989 年に観光客数が飛躍的に増加し、その後も横浜の観光客数は増加し続けている。開国博 Y150（開港 150 周年記念事業）が開催された 2009 年には年間の観光客数が 5000 万人を突破した。

このように、横浜の観光客の満足度・来訪意識・来訪頻度は非常に高く、年間観光客数は一貫して増加傾向にある。集客力の強化を意識したみなとみらい 21 事業の成果がここに表れている。

⑤みなとみらい地区の変化（まとめ）

みなとみらい地区は、まちを歩く人の視点を重視した再開発によって、歩きやすく景観の美しい地域となった。また、戦略的な PR 活動により、注目度の高い地域になった。その結果、グラフ 1 の「立ち寄り先」からもわかるように、横浜市で最も集客力の高い地域になっている。

(2) 交通網の発達

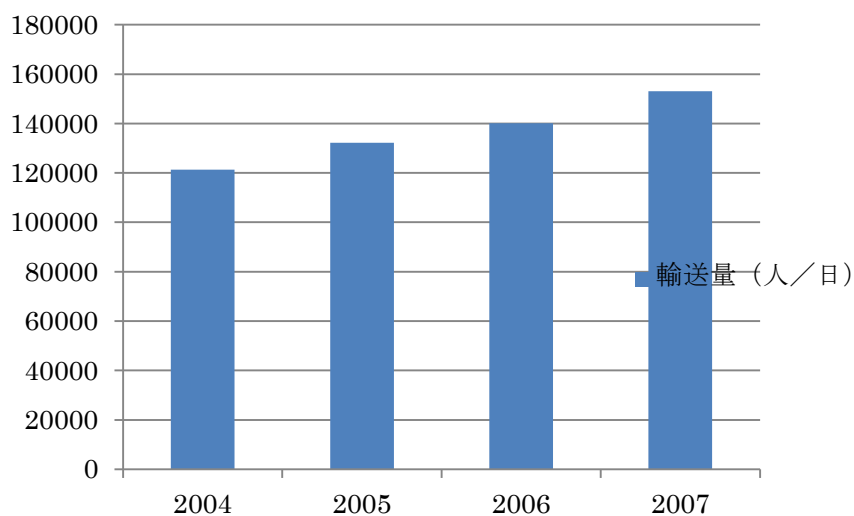
①都心からのアクセス

高度経済成長期には、港湾関係の輸送用自動車が増え、東京と横浜都心を結ぶ

道路が慢性的に渋滞していた。そのため、六大事業では「ベイブリッジ建設」と「高速道路網建設」が計画された。1989年にベイブリッジが完成し、1994年には首都高速道路湾岸線の横浜ベイブリッジ-羽田空港間が開通した。また、1992年には、みなとみらい大通りに直結する首都高速道路横羽線「みなとみらいランプ」が開通した。これらによって、都心から横浜へのアクセスが改善され、交通面での横浜の利便性が飛躍的に向上した。

②みなとみらい線の開通

六大事業のひとつである「高速鉄道（地下鉄）建設事業」として、みなとみらい線の建設が実行された。東急東横線から直通で、横浜駅からみなとみらい地区を通り、元町中華街までの区間で整備された。みなとみらい地区の交通利便性が向上して地区内の周遊性が高まったうえに、横浜の二つの都心が交通面で一体化された。また、東急東横線から直通であるため、渋谷方面を中心とした東京都心からのアクセスが改善された。



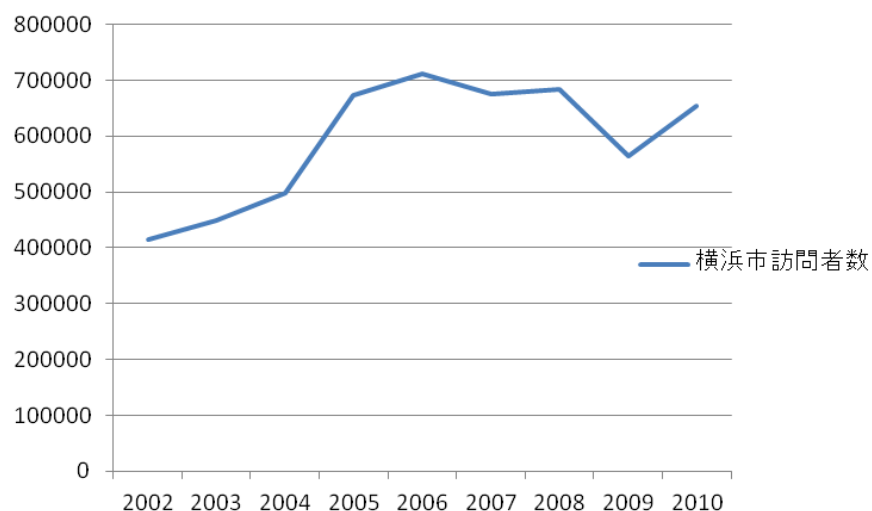
グラフ 6 みなとみらい線輸送量推移

(横浜高速鉄道株式会社 「平成 20 年度経営分析報告書」をもとに作成)

(3)国際化

2000年代に入ると、横浜で国際イベントや国際コンベンションが開催されるようになった。2001年からは、現代アートの国際イベントである「ヨコハマトリエンナーレ」が

開催されるようになった。2002年には、サッカーワールドカップ日韓大会が開催された。その結果、2005年頃まで横浜を訪れる外国人観光客が増加した。2006年以降は減少傾向にあるが、2010年の羽田空港の国際化により、海外から横浜市へのアクセスが飛躍的に向上し、横浜を訪問する外国人観光客のさらなる増加が期待されている。



グラフ 7 横浜市外国人観光客数推移

(財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー「羽田空港国際化に伴う外国人来街者ニーズ把握調査報告書」2011 図表 1-2-1 外国人来街者数 訪日外国人数からの推計値をもとに作成)

(4) 寿町への影響

以上のように、寿町が隣接する横浜都心部では、1980年代から2000年代にかけて集客力の強化・交通網の発達・国際化という変化が起こった。ではこうした変化は寿町にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

以上に上げた変化が寿町に及ぼした影響としてあげられることは、海外からのバックパッカー等をターゲットにしたホステル業を開業できる環境を寿町にもたらしたことである。集客力の強化を意識したみなとみらい再開発は、寿町の徒歩圏内にあるみなとみらい地区の観光地としてのブランド力を向上させた。交通網の発達は、各地からの横浜へのアクセスと、みなとみらい地区内の利便性を向上させ、寿町周辺の周遊性が高まった。また、国際イベントの開催によって2005年頃まで外国人観光客数が増加した。こうした変化は、観光客、とりわけ安宿を好む外国人バックパッカーをターゲットにしたホステル業を開業できる環境を寿町に作ったといえる。周辺地域の変化を年表に表すと以下の表2のようになる。表2からわかるように、ヨコハマホステルヴィレッジが開業した2005年は、みなとみ

らい 21 事業がほぼ完了した時期であり、第二回ヨコハマトリエンナーレが開催され外国人観光客が増加した時期でもある。

表2 横浜寿町年表

寿町	横浜
	1983 みなとみらい21事業着工
	1989 横浜博覧会(開港130周年)
	1991 パシフィコ横浜(横浜国際平和会議場)完成
	1993 ランドマークタワー完成
	1994 ベイブリッジ完成
	1997 クイーンズスクエア完成
	2002 第一回横浜トリエンナーレ、サッカーワールドカップ
2004 Funnybee 設立、岡部氏さなぎ達と出会う	2004 みなとみらい線開業
2005 ヨコハマホテルヴィレッジ設立	2005 第二回横浜トリエンナーレ
2007 コトラボ合同会社設立	2008 第三回横浜トリエンナーレ
	2009 開国博Y150(開港150周年)
	2011 第四回横浜トリエンナーレ

みなとみらい21事業
 イベント・国際コンベンション

5-2 山谷と寿町の比較

山谷は、台東区と荒川区の境目に位置し、寿町と同じく日本三大ドヤ街の一つである。戦前より都市型スラムが形成され、戦後は「寄せ場」（日雇労働力の供給地）として発展した。大阪の釜ヶ崎、横浜の寿町とともに日本三大ドヤ街として知られている。山谷と寿町を J・H・スチュワードが示した 3 つの手順で分析し、両者の比較を行う。まず共通項を導き出すことを通じて周辺地域の変化と対象地域の関係性のパターンを明らかにする。そして両地域の相違点を見つけることで、寿町で生じている特有のパターンを考察する。

(1) 山谷

① 環境と文化の核の相互関係

山谷における文化の核（生生活動・経済活動に深く関わる特色）を「寄せ場の機能を持つ地域構造」とする。ここでは、この「寄せ場の機能を持つ地域構造」と環境の相互関係

を分析する。

戦前の山谷では、寄せ場の前身である都市型スラムが形成されていた。都市型スラムでは、日雇人夫のほか大道芸人、行商、露天商、バタヤ（廃品回収業）など多様な都市雑業層のたまり場となっていた。安価な労働力が豊富に集まっていたため、戦後は手配師制度（日雇労働者を供給する制度）ができ、寄せ場（日雇労働力の供給地）の機能を持つようになった。高度経済成長期に入ると、農村解体による農業離職者、エネルギー転換政策による炭鉱労働離職者による都市への人口移動の加速を背景に、日雇労働市場は急速に肥大化した。さらに、1964年日本の戦後復興を象徴する国家規模のイベント東京オリンピックの開催が寄せ場のさらなる拡大を促進した。土木・建設業などに従事する大量の末端労働力が必要とされ、その供給を山谷が担ったからである。こうして単身男性に特化した日雇労働者のまちが形成されていった。

しかし拡大してきた日雇労働市場に次第に構造的変化が起きる。1960年代後半より港湾が日雇労働市場から撤退し、1970年代後半より製造・陸上運輸が撤退し、労働市場の需要は土木・建設業に特化されていった。1980年代からは、建設現場における作業過程の機械化、技能の合理化が進み日雇労働者に対する需要が減少した。

このように、山谷は、東京の戦後復興と高度経済成長期の急速な発展の影響を受けて寄せ場の機能を拡大させ、日雇労働市場の縮小とともに寄せ場の機能を喪失していった。その結果、日雇労働者が寝泊まりしていたドヤ（簡易宿泊所）の空室が増え、1970年代のピーク時に214軒あったドヤも廃業が続き、2000年には165件までに減少した。

②環境の変化と行動パターンの関係性

ドヤの空室増加・廃業が進む中、山谷の周辺部では次のようなことが起きていた。まず、1980年代初め、山谷の最寄り駅である南千住を通る首都圏新都市鉄道の建設が計画された。つくばエクスプレスである。開業した2005年の1日平均乗客数は15万700だったが、2010年には28万3600人まで増加した。つくばエクスプレスは、首都圏北東部における都心と郊外を結ぶ交通機関としての機能を年々高めている。南千住はその路線上で都心の入り口に位置しており、つくばエクスプレスによって都市と郊外の結節点という要素を潜在的に持つことになったといえる。さらに、南千住では、1987年以降、南千住駅から旧汐入地区周辺を中心に大規模な再開発が始まり、現在も進行中である。大幅な区画整理が行われ、道路の拡張、超高層マンションの建設が進められた。再開発により南千住駅周辺の利便性・安全性が高まった。また、山谷周辺には3つの人気観光スポット浅草・秋葉原・六本木が1980年代～2000年代に発展した。いずれも南千住から日比谷線や銀座線で10～17分で行くことができる。江戸の下町情緒を色濃く残す浅草は、1980年代と2000年代の海外における日本ブームにより外国人観光客が増加した。秋葉原は2000年以降アニメ・同人誌系の店舗（いわゆる「オタクショップ」）が急増し、「電車男」や萌えブームの影響で、秋葉原への注目が集まり大衆化が進んだ。同時期に海外で日本アニメ・漫画ブームが起り、外

国人観光客に人気の観光スポットになった。六本木は国内最大級の都市開発が行われ、美術館、展望台、映画館、ブランド街のショッピングモールなど、森ビルが17年かけて建設した施設は、人気観光スポットとして注目を集めている。2003年にオープンした六本木ヒルズは、開業後5年で来場者は約2億人となった。

こうした周辺地域における交通の利便性の向上や再開発、観光スポットの発展という変化が起きるなか、山谷で徐々に起こっていたのがドヤのホステル化である。新たな客層を取り込もうと老朽化したドヤを安価な宿泊施設として改装するドヤのオーナーが増加した。インターネットの普及もあり、インターネット予約で宿泊する外国人バックパッカーが増え、ドヤのオーナーたちは新たな客層獲得に成功した。このように、寄せ場の機能を喪失した山谷では、周辺地域の発展がドヤのホステル化というオーナーたちの行動パターンを導き出したのである。

③行動パターンが地域の様相に及ぼす影響

ドヤのホステル化というオーナーたちの行動パターンは、周辺地域を訪れる人々に安価な宿泊施設を提供するという新たな機能を山谷に付与した。それまで日雇労働者のまちとして発展し、社会的に排除された貧困層を受け入れる地域であり、安価な労働力を周辺地域に供給する機能を持っていた。それがドヤのホステル化によって、観光客などに安宿を提供する地域として機能するようになったのである。

以上を図式化すると、以下の通りになる。

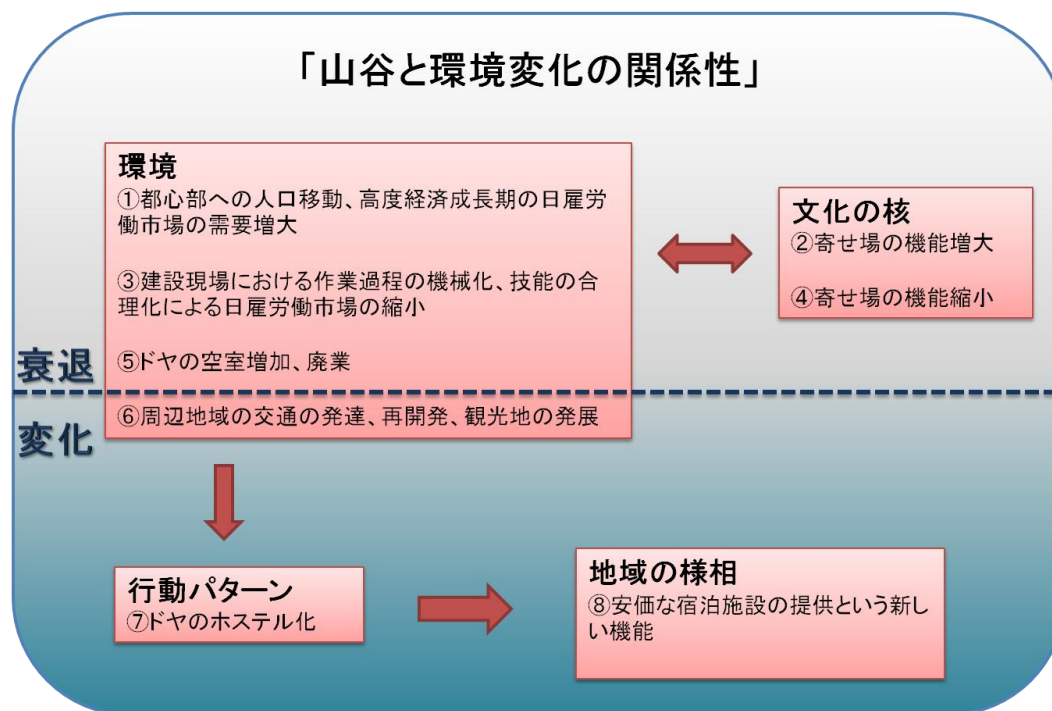


図 8 山谷と環境変化の関係性

(2) 山谷と寿町の比較

同じ手順で寿町と環境変化の関係性を図式化すると次のようになる。

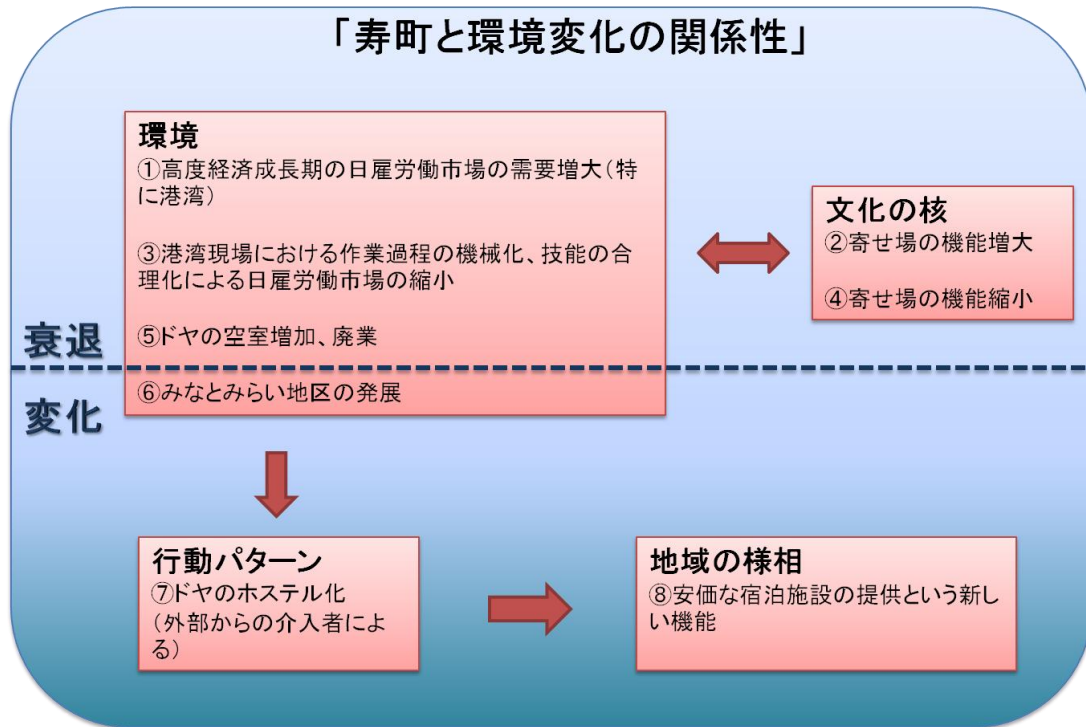


図 9 寿町と環境変化の関係性

まず、山谷と寿町を比較し、共通項に注目すると次のことが分かる。寄せ場という文化の核を持つ地域では、高度経済成長期に周辺地域の発展とそれに伴う日雇労働力の需要の増大によって、その機能を増大させる。そして、港湾・土木・建設現場の合理化・機械化によって日雇労働力に対する周辺地域からの需要が減少すると、寄せ場の機能を縮小、喪失していき、ドヤの空室が増加する。同時期に、周辺地域で交通網の発達や再開発、観光地の発展などが起き、ドヤのホステル化が促進される。その結果、周辺地域に訪れる人々に安価な宿泊施設を提供するという新たな機能が地域に付与されるようになる。

次に、山谷と寿町の相違点に注目する。山谷と寿町の最大の違いは、ドヤのホステル化が山谷ではドヤのオーナーによって行われ、寿町では外部からの介入者によって行われている点である。寿町でドヤのオーナーによる自発的なホステル化が起きなかった要因としては、ドヤの経営が安定していたことがあげられる。寿町では、定着層が多いため、山谷と比べて新たな客層の獲得の必要性がそれほど高くなかったと考えられる。では、ホステル化において外部からの介入が起きた要因は何か。考えられるものとして、外部と寿町をつなぐパイプ役の存在をあげる。寿町のドヤのホステル化を行ったヨコハマホステルヴィ

レッジ設立者である O 氏は、NPO 法人さなぎ達の活動への参加を通じてドヤのオーナーたちが「山谷のようにホステル化をしてみたい」と言っているのを知ったという。NPO 法人さなぎ達が外部と寿町をつなぐパイプ役を果たし、寿町でドヤのホステル化が起きた重要な要因の一つとなっていると考えられる。そのため次の(3)で、NPO 法人さなぎ達が寿町で果たしている役割を考察する。

(3) NPO 法人さなぎ達が寿町で果たしている役割

ここでは、さなぎ達が寿町で果たしている役割について検証し、外部からの介入者によるドヤのホステル化が起こったメカニズムを分析する。まず①でさなぎ達の活動歴をまとめ、②でさなぎ達の特徴について述べる。そして③で、①と②を踏まえ、さなぎ達が寿町で果たしている役割について考察していく。また、④でさなぎ達が実際寿町にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

①さなぎ達の活動歴

NPO 法人さなぎ達事務局長櫻井武磨氏へのインタビューをもとにさなぎ達の活動歴をまとめると以下のようになる。

さなぎ達の活動の始まりは、1983年に横浜市で起きた「ホームレス襲撃事件」にさかのぼる。「ホームレス襲撃事件」は、中学生の少年らが路上生活者を暴行し、ごみ箱に投げ入れた事件である。加害者の少年たちの「まちをきれいにしてやった」という供述は、マスメディアによってセンセーショナルに取り上げられ、社会に大きな衝撃を与えた。

このとき、マスメディアの事件の取り上げ方に疑問を感じた市民たちがいた。それが後に NPO 法人さなぎ達を立ち上げた櫻井氏をはじめとするメンバーである。加害者の少年たちについては大量の情報がマスメディアによって流されているが、被害者については単に「浮浪者」と説明されていた。なぜ被害者については報道しないのか、彼らは一体どんな人たちなのか。報道機関に問い合わせたが、はっきりした答えはかえってこなかったという。このことをきっかけに、寿町を中心に「木曜パトロール」という活動が実施されるようになった。木曜パトロールとは、木曜日の夜に路上生活者への声かけをする活動である。これは路上生活者を支援する活動ではなく、路上生活者とコミュニケーションをとり、彼らがどういう人なのかを知ろうとする活動である。

1年目は全くコミュニケーションが成り立たなかったという。外部から突然やってきた櫻井氏たちに、寿町の住民はなかなか心を開こうとしなかったのである。しかし、2年目、3年目と活動を続けていくうちに、住民たちは少しずつ自分たちのことを話してくれるようになった。ただ、彼らの話を聞くうちに、彼らがどういう人たちなのかますます分からなくなると櫻井氏はいう。寿町に来る前の人生や寿町に住むようになったいきさつは住民一人一人異なり、彼らをひとくりにできない「何か」があった。住民たちのその多様性

に圧倒されるばかりで、彼らのために何ができるかということまで考えられなかったという。

「彼らのために何ができるか」という問いの答えを櫻井氏たちが出せないでいる間に、住民たちの方から「日中過ごすための居場所が欲しい」という要望が出てきた。かつて日中は寿町の外へ日雇労働に出ている住民たちだが、高齢化が進み、寿町のなかで一日過ごすことが多くなり、日中過ごすための居場所を必要とするようになっていたのである。また、彼らのほとんどは単身者であるため、人とつながりを持つことのできる場所を欲していたということも背景にあると考えられる。

こうした住民たちの要望に対し、櫻井氏たちは2つの理由で断った。1つは広いスペースを確保できないということ、2つ目は横浜市が既に居場所として用意している施設があったということである。それでも「どうしても居場所がほしい」と住民が主張するため、櫻井氏たちはある条件を提示した。それは、「住民の手で管理すること」である。自分たちで規則を作り、きちんとそれを守って管理するなら、事務所の1階部分を貸し出す、と櫻井氏たちは言った。そこで住民たちは次のようなルールを作った。酒を持ち込まない、煙草を吸わない、暴力を振るわない、の3つである。櫻井氏は、このルールは絶対に守られないと思ったという。なぜなら酒と煙草は寿町の住民にとってコミュニケーションツールであり、喧嘩は寿町では日常茶飯事だったからである。すぐにルールを破る住民が出るだろう。十数年寿町の住民と接してきた櫻井氏たちにとって、このルールが守られるとは到底考えられなかったのである。こうして、ルールが破られたらすぐに閉鎖する、という条件のもと、1999年に住民たちの憩いの場「クレージーサロン」がオープンした。

すぐにルールは破られるだろう。櫻井氏たちはそう考えた。ところが、数か月、半年、1年たっても酒、煙草は一切持ち込まれず、喧嘩も起きなかった。事務所の1階は住民たちの手によって管理され、活気に満ちた空間になっていたのである。食事の時間には、それぞれが持っている食べ物を鍋にいれ、みんなで分け合って食べていたという。酒、煙草、暴力。これらが当たり前存在だった寿町で、この3つがない空間を住民たちは自分たちの手で作りあげた。このような住民たちの姿を見た櫻井氏たちは、この居場所を永続的に維持していくことが自分たちの役目だと考えるようになり、NPO法人化を決め、2001年に「NPO法人さなぎ達」が誕生した。

「クレージーサロン」は、NPO法人さなぎ達の誕生と同時に「さなぎの家」に改名した。暗く陰鬱な雰囲気寿町で、ぽっと明りが灯ったように活気のある空間には、住民だけではなく、外部からも人が出入りするようになった。ボランティアに関心を持つ学生たちである。彼らによって、さなぎ達の活動の幅を拡大させていった。現在さなぎ達では、居場所支援のほかに「さなぎ食堂」を運営して安価で栄養のある食事を提供する事業を運営しているが、さなぎ食堂のアイディアは、ボランティアの学生たちが出したものである。さなぎの家で住民たちから安くて栄養のある食事をとりたいという住民たちのニーズを聞き出した学生たちのアイディアによってさなぎ食堂の開設が決まった。

学生以外にも寿町を出入りする人々が増えていった。そのひとりが Y 氏である。Y 氏は、現在寿町で「ポーラのクリニック」院長を務めている寿町唯一の医者であり、さなぎ達の理事長でもある。彼が寿町にやってきたのは、アメリカ出身の妻ポーラさんの鬱がきっかけだった。彼女はアメリカ留学中の Y 氏に出会い、日本で結婚生活を始めたが、日本社会になじめず、寿町で毛布を配る教会の活動にのめりこむようになった。Y 氏は、妻と一緒に何かしたいと考え、寿町を訪れるようになった。住民のほとんどが単身者である住民には、病院に連れて行ったり最期を看取ったりしてくれる家族がいない。孤独に死んでいく住民たちの現実を目の当たりにした Y 氏は、総合病院の循環器内科部長を辞め、2004 年 12 月に寿町でクリニックを開き、2005 年にはさなぎ達三代目理事長に就任した。最初は自ら簡易宿泊所まで往診に出向いていたが、治療だけで精一杯になっていった。そこで安否確認をしたり簡易宿泊所から診療所まで付き添ったりするボランティアが必要であると考え、2007 年にさなぎ達で「寿みまもりボランティアプログラム」を立ち上げた。スタッフは主に、インターネットやテレビ新聞を通してさなぎ達の活動に興味を持った学生ボランティアである。このようにして Y 氏、学生ボランティア、さなぎ達職員の連携によって、寿町で孤独死をなくしていく取り組みが始まった。

こうして、木曜パトロールから始まった櫻井氏たちの取り組みは、居場所支援に発展し、さらにさまざまな人々をまきこみながら食や医療の分野にも及ぶようになった。

②さなぎ達の特徴

以上(1)のさなぎ達の活動歴をふまえ、さなぎ達の活動の特徴をまとめると、以下のようになる。

(i)住民との信頼関係

さなぎ達の特徴の一つとして、住民との間に築かれた友人同士のような信頼関係があげられる。さなぎ達は、1984 年から現在まで木曜パトロールを続けている。彼らは、「支援したい」という思いでパトロールを始めたのではなく、寿町の住民たちのことを知りたい理解したいという純粋な気持ちから始めた。私たちが友達を作るときまず相手を知ろうとすることから始めるように、住民たちをよく知ろうとすることから住民との関係構築を始めたのである。その結果、「支援する側・支援される側」という関係ではなく、友人同士のような関係が築かれた。そのためさなぎ達は住民にとって最も身近な存在といえる。

(ii)住民が主人公

さなぎ達の特徴の 2 つ目は、住民が主人公であることである。櫻井氏によると、さなぎ達の活動の原動力は、全て住民たちの「～したい」という声なのだという。例えば、さな

ぎ達に取り組んでいる活動のひとつに寿町の緑化活動があるのだが、これはもともとある住民の「暇だから花を植えたい」という一言から始まったのだそうだ。学生ボランティアも加わって緑化活動は寿町全体で行われた。現在寿町にはいたるところに花や木が植わっているプランターが置いてある。ちなみにこの緑化活動によってまちがきれいになり、不法投棄が激減するという成果も出ているそうである。

このように、さなぎ達の活動は基本的に住民たちの「～したい」という声によって展開されている。

(iii)活動分野の幅広さ

さなぎ達の特徴の3つ目は、「活動分野の幅広さ」である。もともとさなぎ達は、特定の分野で専門性を持って活動する団体ではなく、寿町の住民たちの「～したい」という声に、ジャンルを問わず「じゃあ一緒にやってみよう」と応じ、居場所支援や食、緑化活動と活動分野を広げてきた市民グループである。高齢者福祉やまちづくりといった用語でひとくりにできないのがさなぎ達の特徴のひとつといえる。

③さなぎ達が寿町で果たしている役割

以上(2)で述べたさなぎ達の3つの特徴をふまえ、さなぎ達が寿町で果たしている役割を以下に述べる。

(i)寿町という存在を外部に発信する役割

さなぎ達は特別外部に対してPRしようとしているわけではないが、よく取材され、さなぎ達に関する記事が新聞やインターネットなどに掲載されている。こうした取材記事を通じて寿町の情報が多く発信されている。

よく取材される理由は2つあると私は考える。1つは、結成当初から住民との関係が「支援する人間対支援される人間」ではない点である。住民の自発性に基づいた活動のあり方によって、他の多くの市民ボランティアと差別化されている。2つ目は、高齢者の孤独に真正面から向き合っている点である。寿町では、高齢化している上に、さまざまな事情から家族や親類と縁が切れている住民が多い。そのため孤独による精神的な病や孤独死が早期から問題となっていた。さなぎ達はこうした高齢化した住民たちの孤独の問題に「さなぎの家」の開設や「寿みまもりボランティアプログラム」の実施などで対処している。現在超高齢化社会を迎えている日本では、高齢者の孤独という問題が多く日本人にとって他人事ではない切実な問題となってきている。そのためさなぎ達に取り組んでいる活動は、注目を浴びやすいのだと考えられる。

(ii)外部と寿町内部の橋渡し役

さなぎ達が寿町で果たしているもう一つの役割として、外部と寿町内部の橋渡し役があげられる。私がさなぎ達を訪問した際、私のほかに一人の大学院生が訪れていたのだが、彼は「寿町に関わるならさなぎ達のところに行けばいいと先輩に言われた」と話していた。美術大学で映像を学んでいる彼は、インターネットで寿町のことを知り、ドキュメンタリーを撮りたいと思ったのだが、どのように住民たちにアプローチしてよいか分からなかったという。そんな彼に先輩が勧めたのがさなぎ達とコンタクトをとることだったのである。「寿町に関わるならさなぎ達のところに行けばいい」と彼の先輩に言わしめた要因は次の2つであると私は考える。1つは、さなぎ達が住民に最も近い存在であり、メンバーの中には20年以上地域に根付いた活動をしている人々がいるということである。居場所や食、医療など住民たちの暮らしに広く深く関わってきた団体であるから、まちや住民のことを知り尽くしている。そのため、まちのことや住民のことを深く知りたいと思う人にとって、さなぎ達は貴重な情報ソースとなるのである。2つ目は、さなぎ達の活動分野が幅広く、どんな動機を持った人でもさなぎ達を訪問しやすいということである。この訪れやすさが「寿町に関わるならさなぎ達のところに行けばいい」と言われる要因のひとつとなっていると考えられる。

このようにNPO法人さなぎ達は、メディアを通じて外部の人間に寿町を訪れるきっかけを与え、寿町に興味を持った外部の人間と内部をつなぐパイプ役を寿町で果たしている。こうしたパイプ役が寿町に存在していたために、ドヤのホステル化において外部からの介入が起きたのだといえる。

④寿町への影響

ここでは、実際にさなぎ達がどのような影響を寿町に与えているのかを考察する。具体的には、次の2点を中心に考える。1つ目は、どのような人々をどのように橋渡ししているのかという点である。2つ目は、さなぎ達が住民にどのように受け止められているかという点である。

さなぎ達には学生などの若者がボランティアとして訪れることが多いようである。インターネットやテレビ、新聞などを通じてさなぎ達の活動に興味を持った若者たちがさなぎ達を訪れ、さなぎ達はボランティアとして彼らを受け入れる。そうして若者たちはさなぎ達でのボランティア活動を通じて寿町の住民たちと関わり始める。

例えば、さなぎ達の活動歴でも少し述べたが、さなぎ達では「寿みまもりボランティアプログラム」というプロジェクトを実施している。このプロジェクトでは、医師や看護師、ヘルパー、ボランティアがチームを組んで、寿町の住民の訪問や簡単な生活介助、安否確認といった見守り活動を行っている。現在十数人のボランティアが参加している。このように、さなぎ達は、自主的に立ち上げたプロジェクトを通じて外部から学生などのボラン

ティアを寿町へ橋渡ししている。

では、こうしたボランティアの取り組みはどのように住民に受け止められているのだろうか。寿みまもりボランティアプロジェクトに対する住民の声を取り上げた新聞記事を紹介する。

寿町地区にある「ポーラのクリニック」。ここで、8月下旬、簡易宿泊所に1人で暮らす腎臓がんの男性(78)のカンファレンスが行われた。集まったのは。医師、看護師、ケアマネージャー、区役所、ボランティアらによる「寿見守りボランティア」の活動に加わる人たち。彼らがこの男性を支えていく。

同クリニック院長のY医師(56)が男性の体調を尋ね、今後の治療方針を説明した。今どんなことに困っているかなど、全員で情報を共有する。10年ほど前から寿地区に暮らす男性は今年体調を崩し、がんが判明。肺への転移もある。しかし、住み慣れた場所での最後を望んでいる。

「ひとりじゃないから心強い。助かるよ。」男性は静かに言った。

男性宅にはヘルパーが週2回、訪問看護師が週2回通うほか、ボランティアとしてKさん(28)が週2回訪ねる。Kさんは、Y氏が理事長を務め、寿地区を衣・医・食・職・住の面から支援するNPO法人「さなぎ達」の職員で、見守りボランティアに参加している。買い物や散歩などをしながら男性の話を聞く。体力をつけたいのに食事がのどを通らないあせりや体の痛み、不安をKさんに打ち明ける。(中略)

9月、腎臓がんの男性は、「最後にもう一度居酒屋に行きたい」と言った。Kさんは、Y医師に相談し、看護師の女性と3人で居酒屋に行った。よく笑い、よく話した。男性はサンマを一匹食べることができた。

男性はKさんと看護師の2人を「友達」だと言った。友達なんだから「気を使うな」「病人扱いするな」。よくそう話した。10月下旬、週に一度の通院日。車いすでKさんとクリニックに行った男性はY医師に、「お別れにきたよ」と告げた。

翌日の朝、男性は自室で倒れた。Kさんや看護師など男性を知るメンバーが宿泊所に駆けつけた。Y医師が最期に近いことを確認する。

Kさんは額に手をあて「今日はずっといるから大丈夫だよ」と声をかけた。

昼過ぎ、長く1人で生きてきた男性は、人生の最後にできたかけがえのない「友達」に見守られながら、静かに旅立った。

(朝日新聞 2010.11.5)

家族がおらず兄弟姉妹親戚とも絶縁状態であることが多い寿町の住民にとって、死期が近くなったとき、この見守りボランティアの存在は精神的な支えになるのだろう。ただ、住民全体がさなぎ達をどう受け止めているのか未知である。そもそもこのプロジェクトのサービスが寿町住民全体にいきわたっているとはまだ言い難いと私は考える。寿町で年間

100～150人の住民が孤独死するなかで、このプロジェクトで孤独死を免れた人々は5年間で約30人、つまり平均して年間約6人のみだからである。ボランティア十数人を寿町に橋渡しするだけでは影響はまだ限定的といえる。

6章 周辺地域のアートによる地域再生まちづくりの影響

6-1 既存建築物を活用したアート活動の先行モデルの提示

ここでは、寿町に影響を及ぼしている周辺地域の変化として、黄金町のアートによる地域再生まちづくりをとりあげ、それが具体的にどのような影響を寿町に及ぼしているのかを述べる。

4章でも述べたように、2000年代より寿町周辺では既存建築物を活用したアート活動が活発化した。なかでも大きな転機ともいえるのが、黄金町におけるアート活動の活発化である。横浜市が推進していた「歴史を生かしたまちづくり」の流れから歴史的建築物を活用してアート活動の拠点とする取り組みが先に始まっていたが、2006年より黄金町で歴史的建築物でない建築物を活用し、街の再生を目指す取り組みが始まった。

黄金町とは、京浜急行線日の出町駅から黄金町駅を結ぶガード下の路地一帯の通称である。寿町と同様に、みなとみらい地区から徒歩圏内にある。黄金町でアート活動が始まった背景には、まちの衰退という深刻な問題があった。この発端は、2002年に京急高架補修工事のために行われた高架下の小規模店舗の強制退去である。強制退去の結果、高架下で営業していた違法な風俗店などが周辺地域に拡散し、健全な店舗や地域住民の転出が相次ぎ、生活環境が悪化するという問題が生じていた。2005年に違法な風俗店の掃討を目的とした「バイバイ作戦」が神奈川県警によって実施されたが、まちに人が来なくなるという新たな問題が浮上した。違法な風俗店は一掃したが、人の往来が途絶えたことで痛手を受けた健全な近隣商店が少なくなかった。こうしたまちの現状に立ち向かうため、始まったのがアートによる地域再生まちづくりである。2006年に、古い木造建築の空き店舗を改装した「BankART 桜荘」がオープンしたのが始まりである。「BankART 桜荘」の1階は展覧会やコンサートが開けるオープンスペースとなっており、2階はアーティストのためのアトリエと宿泊施設を兼ねた空間として活用されている。この「BankART 桜荘」のプロジェクトは、横浜市文化芸術都市創造事業部と中区役所による店舗転用のモデル事業としてBankART1929という団体が運営している。BankART1929は、4章で述べたBankART1929Yokohama（旧第一銀行）、BankART1929馬車道（旧富士銀行）、BankART StudioNYK（旧日本郵船倉庫）を運営する団体である。馬車道周辺などの「歴史的建築物をアート活動拠点として活用する取り組み」から、黄金町の「既存の建築物をアート活動拠点として活かして地域再生を図る取り組み」が派生し、新しいアート活動拠点のモデルが誕生したのである。黄金町では、その後、2007年に、京急高架下の空き店舗をスタジオに転用するための設計ワークショップが開催され、2008年には黄金町バザールという大規模なアートイベントが開催され、作品の展示やワークショップ、まち歩きツアーなどが実施された。この黄金町バザールの成果を受け、現在ではNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターが継続的にイベント事業を実施している。

では、こうした黄金町のアートによる地域再生まちづくりはどのように寿町に影響を及ぼしているのだろうか。黄金町と寿町を比較してみると、黄金町の「既存の建築物を活用してアーティストが滞在・創作できる拠点として活用する」というアイデアが寿町に継承されていることがわかる。2008年にアーティストのアート活動を支援する寿オルタナティブネットワークが設立され、寿町の一角にある南雲ビル²を改装してアーティストが滞在創作できるスタジオが作られた。寿オルタナティブネットワークとは、横浜市の公務員 K氏が個人の立場で設立した任意団体である。構成メンバーは多様であり、アーティストや建築家、社会学者、公務員などがコアスタッフとして参加している。寿町で活動するアーティストへの中間支援やイベントの開催事業を担っている。2010年には、ドヤを拠点とした合宿形式のイベント「寿合宿」を開催し、6人のアーティストが参加した。現在は自主的にドヤに滞在しながら創作活動するアーティストもいる。このように、寿町では、黄金町同様に既存の建築物をアーティストの滞在・創作拠点として活用することでアート活動の活発化が推進されている。

ただし、黄金町の取り組みがそのまま寿町に受け入れられたわけではない。寿オルタナティブネットワーク設立者である K氏は、黄金町を反面教師としてとらえている。K氏は黄金町を「きれいになりすぎた」と表現している。黄金町では、クリアランスを行った上で、空き店舗の外装内装の両方をきれいに改装して活用している。寿町では、住民に使われていない部屋をあまり改装せずほとんどそのままスタジオとして使うか、改装する場合は内装を中心に改装して使っている。寿オルタナティブネットワークは「まちにとけこむ」ということを目標に掲げてアート活動を展開しているのだという。

以上のように、黄金町は寿町にとって反面教師という意味も含め、既存建築物をアーティストの滞在・創作拠点として活用するというアイデアが寿町に継承されていることから、アート活動の先行モデルとして寿町に影響を及ぼしていることが分かる。

6-2 黄金町と寿町の比較

寿町にとって既存建築物を活用したアート活動の先行モデルとなった黄金町と寿町を J・H・スチュワードが示した3つの手順で分析し、両者の比較を行う。まず共通項を導き出すことを通じて周辺地域の変化と対象地域の関係性のパターンを明らかにする。そして両地域の相違点を見つけることで、寿町で生じている特有のパターンを考察する。

(1) 黄金町

² 南雲ビルはドヤ（簡易宿泊所）ではなくマンションである。改装された部屋が3階4階にそれぞれ2室ずつある。そのうち1室が寿オルタナティブネットワークの事務所になっている。

① 環境と文化の核の相互関係

黄金町における文化の核（生存活動・経済活動に深く関わる特色）を「違法な風俗店の集積」とする。2000年代に入り、違法な風俗店が取り締まり強化によって排除されると、黄金町では地域経済が打撃を受け空き店舗が増加した。取り締まり強化という環境変化が文化の核を失わせたのである。

② 環境の変化と行動パターンとの関係性

違法な風俗店が排除されて地域経済が危機的な状況に陥り、黄金町で空き店舗が増加していた頃、黄金町周辺地域では、「歴史的建築物をアート活動拠点として活用する取り組み」が活発化していた。黄金町の地域経済が危機的な状況にあるなか、黄金町周辺地域では、地域活性化のための新たな取り組みが始まっていたのである。こうした環境変化を受けて生まれた行動パターンが、住民や行政による「既存建築物を活用したアート活動の開始」である。地域経済の衰退を象徴するように増加していた空き店舗をアート活動の拠点として活用する試みである。地域の危機的な状況と、歴史的建築物をアート活動の拠点として活用するという先行モデルが周辺に現れたことで、空き店舗という既存建築物をアート活動の拠点として活用するという行動パターンが生まれたのである。

③ 行動パターンが地域の様相に及ぼす影響

住民や行政の「既存建築物を活用したアート活動の開始」という行動パターンによって、黄金町は、アート活動の拠点の一つとなった。空き店舗を改修し、スタジオとして活用する取り組みが黄金町で広がり、アーティストが滞在しながら創作活動をしたり、展示会やアートイベントを開催したりすることができるようになった。現代アートの国際イベントである第4回ヨコハマトリエンナーレ(2011)では、黄金町は展示会場のひとつとなっている。このように、黄金町は横浜のアート活動の重要な拠点の一つとなっている。

以上を図式化すると次のようになる。

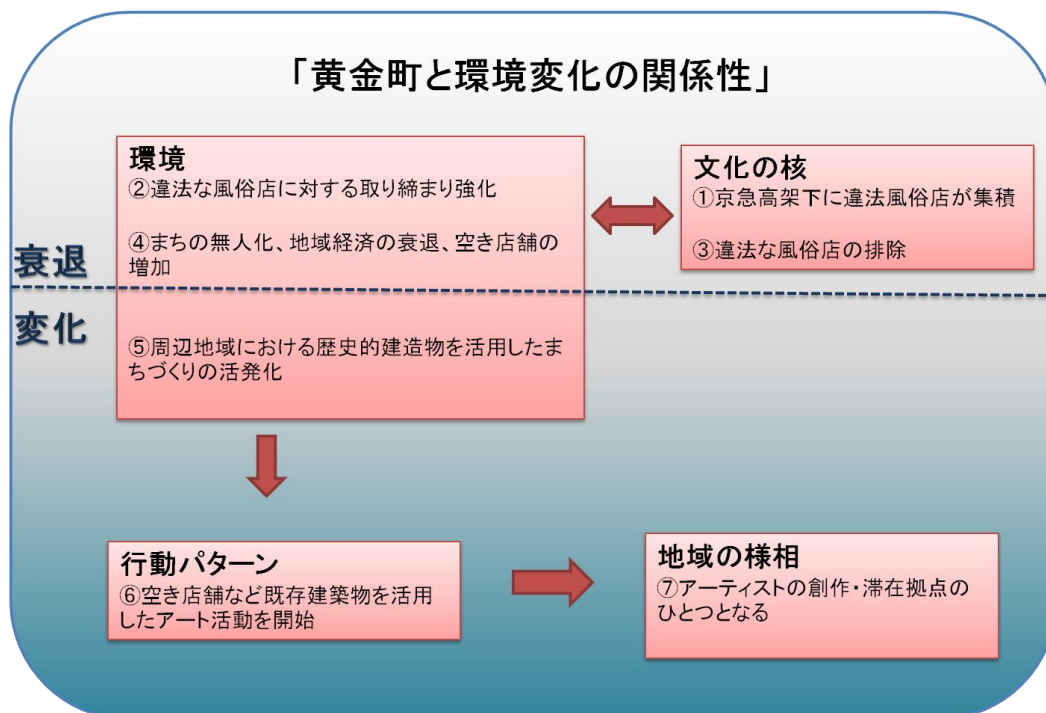


図 10 黄金町と環境変化の関係性

(2) 黄金町と寿町の比較

同じ手順で寿町と環境変化の関係性を図式化すると以下ようになる。

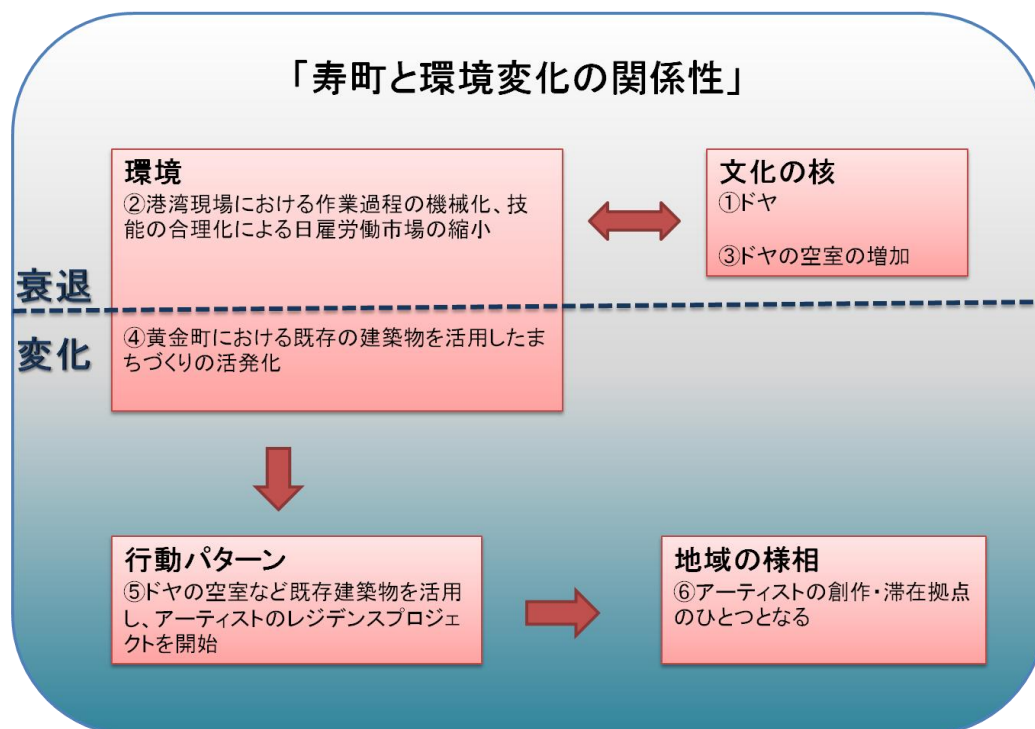


図 11 寿町と環境変化の関係性

黄金町と寿町を比較すると、共通項として次の3つがあげられる。1つ目は、黄金町も寿町も大都市の影の部分を中心に文化の核として持っている点である。みなとみらいに隣接しながら、違法な風俗店、劣悪な生活環境のドヤの集積という、華やかなみなとみらいとは対照的な性質を持っていた。2つ目は、そうした文化の核が社会構造の変化によって変容している点である。黄金町は取り締まりの強化によって、地域経済を支えていた違法な風俗店が排除され、違法な風俗店の集積という文化の核は消滅した。寿町も、日雇労働市場の縮小という社会構造の変化を受け、寄せ場の機能を失い、ドヤの空室が増加した。3つ目は、既存建築物の活用について先行モデルを持っていることである。黄金町は、馬車道周辺の歴史的建築物を活用したまちづくりが先行モデルとなっている。寿町は、黄金町の既存建築物を活用したアート活動が先行モデルとなっている。以上3つの共通点より、次のことが言える。大都市の影の部分を中心に文化の核として持っている地域では、社会構造の変化の影響を受けると、その文化の核が消滅したり変容したりするということが起こり得る。そして周辺地域で現れた先行モデルの影響を受け、地域に新たな機能が付与されることがある。

次に、黄金町と寿町の相違点に注目する。黄金町と寿町の最も大きな違いは、既存建築物を活用したアート活動が住民によって推進されているか、外部の人間によって推進されているかという点である。黄金町では、地元住民たちが2003年に設立した「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」が黄金町のまちづくりの中心的な役割を果たしてきた。当初は違法な風俗店が地域に拡散した状況を改善することが目的だったが、違法な風俗店の排除に成功した後に「まちの空洞化」が課題となり、まちの活性化を促すためのイベントを開催するようになった。こうした初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会の取り組みの流れから生まれたのがNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターである。初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会の副会長のK氏は黄金町エリアマネジメントセンターの理事長、もう一人の副会長T氏は黄金町エリアマネジメントセンターの副理事長を兼任しており、2団体の構成メンバーに重複が見られるが、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会は環境整備やイベント等まちづくり全般、黄金町エリアマネジメントセンターはアート活動の促進による地域活性化に特化している。黄金町エリアマネジメントセンターは、空き店舗を活用したアーティストのレジデンスプロジェクトやアートイベントの開催を行っている。黄金町ではこうした住民によって自発的に設立された団体が既存建築物を活用したアート活動を促進している。

一方寿町では、外部からやってきた人々で構成される寿オルタナティブネットワークが中心となってアート活動を促進している。この黄金町と寿町の違いはなぜ生じるのだろうか。その要因について次の(3)で論じることとする。

(3)黄金町と寿町で相違点が生じた要因

まず、黄金町で住民主体のアート活動の促進が行われるようになった要因として、地域

課題の緊急性をあげる。黄金町では、違法な風俗店の拡散による治安の悪化、違法な風俗店の排除によるまちが空洞化という 2 つの深刻な問題が生じていた。これらは、住民の生活環境に加え、地域内で商店を営む住民たちにとっては生活問題にも関わる問題である。こうした地域課題の緊急性の高さが住民主体のまちづくり活動につながり、住民による地域活性化のためのアート活動の促進が行われるようになった要因となったと考えられる。

これに対し、寿町では緊急性の高い地域課題がない。かつては、不法投棄やホームレスなど貧困層の生活問題、治安の悪さが地域問題となっていた。しかし、不法投棄は、花や木を植えたプランターを置いて不法投棄を防止するというある団体の取り組みによって解消しつつある。ホームレスなど貧困層の生活問題だが、現在寿町ではドヤを住所として生活保護費を受給できるようになっており、住民の 8 割が生活保護を受けている。また、生活支援を行っている団体が複数あり、炊き出しや物資の供給が行われている。そのため、住民たちの生活はある程度保障されているといってもよい。治安についてだが、これも解消しつつある問題である。かつては血気盛んな男たちの喧嘩が絶えなかったというが、現在は高齢者ばかりのまちである。また、福祉関係の施設が増え、福祉関連の女性職員の往来も増えたため、女性も入りやすいまちになっている。このように、現在の寿町には、緊急性の高い地域課題がない。そのため治安の改善や地域活性化のためのアート活動を始めようとする動機が住民にはないのである。

では、なぜ寿町では外部からの介入者によるアート活動が展開されているのだろうか。そもそもなぜ彼らは介入することができたのだろうか。その理由として、寿町と彼らを仲介する人物がいたことがあげられる。その仲介者とは、寿自治会事務局長の S 氏である。寿オルタナティブネットワーク設立者の K 氏は、2006 年より開始したリサーチを通じて、寿町には 30 以上もの様々の団体が互いに複雑な関係を持っていることを知り、新規参入することの難しさを感じたという。そのようななか、K 氏は寿町の地域活動の第一人者である寿自治会事務局長の S 氏と出会い、S 氏に形式的に寿オルタナティブネットワークの代表となってもらうことになった。S 氏は他の団体と接触する際の仲介役を担うなど、寿オルタナティブネットワーク設立とその後の活動展開において重要な役割を果たした。こうした仲介者がいたために、寿町では外部の人間によるアート活動が展開されるようになったのである。

7 章 寿町の地域変容メカニズム

寿町では、ドヤのホステル化とアート活動の活発化という 2 つの変化が起きた。こうした変化が起きたメカニズムとして次のことが考えられる。寿町の地域変容は、周辺地域の変化と、外部と内部をつなぐパイプ役の存在という 2 つの要素がそろって起きたということである。

1つ目の要素である「周辺地域の変化」とは、文化生態学でいう「文化の核」と深く関係のある環境変化のことである。寿町には「寄せ場」や「ドヤ」という文化の核がある。そうした文化の核に大きく影響を及ぼす環境変化が起きたことで、地域が大きく変容した。文化の核と深く関係のある周辺地域の変化として、本稿では大きく分けて2つをあげた。1つは、開発及び開発に伴う社会構造の変化である。横浜では、高度経済成長期に重化学工業を中心とする工業化を進める政策が次々と打ちだされ、港湾施設や工場の建設など産業基盤整備をはじめとする大規模な開発が急速に進められた。その結果、日雇労働に対するニーズが増大し、戦後ドヤ街が形成された寿町は寄せ場の機能を増大させることとなった。高度経済成長が終わり港湾や建設現場での機械化・合理化が進むと、日雇労働へのニーズが縮小し、寿町周辺地域における労働市場の構造的な変化が起きた。その結果、寄せ場の機能が縮小し、ドヤの空室が増加した。さらに周辺地域の再開発が開始され、観光地として発展し始めると、ドヤの空室を活用したホステル化が起きた。つまり、寄せ場の機能を増大・縮小させる変化が周辺で起きたことがドヤのホステル化という寿町の変化につながったのである。さらに本稿では、2つ目の周辺地域の変化として、周辺地域のアートによる地域再生まちづくりの活発化をあげた。具体的には、黄金町の既存建築物を活用したアート活動の活発化を取り上げた。黄金町は違法風俗店が集積していた地域であり、寿町と同様に大都市の影の部分として文化の核として持つ地域であった。黄金町では、2000年代より空き店舗など既存の建築物を改修してアーティストが滞在・制作できる拠点を作り衰退した地域を再生させる取り組みが始まった。オープンスタジオやアートイベントを開催したり、まちあるきツアーを実施したりすることで地域活性化につなげている。寿町と類似した文化の核を持つ黄金町の取り組みが活発化し、メディアにも取り上げられるようになった頃、寿町でも同じようなアート活動の取り組みが始まった。ドヤという既存の建築物を活用したアート活動で地域を活性化するというアイデアが継承されたのである。寿オルタナティブネットワークによってドヤをアーティストの滞在・制作拠点とし、アート活動を推進する取り組みが現在進められている。こうして寿町にとって文化の核である「ドヤ」がアーティストの滞在型制作活動を推進したことで、寿町はアーティストの滞在・制作拠点となり、アート活動が活発化した。

また、外部と内部をつなぐパイプ役の存在という2つ目の要素についてだが、これは、外部からの介入が起きた最大の要因である。パイプ役には大きく分けて2つの役割がある。1つ目は、情報発信をする役割であり、2つ目は外部の人間と内部の人間の仲介をするという役割である。まず情報発信という役割だが、これはNPO法人さなぎ達が担った。寿町という地域は、暗く陰鬱で危険なイメージが定着し、外部の人間から敬遠される地域だった。そのため、世間から広く関心を持たれることはあまりなく、寿町からも情報発信をすることもほとんどなかった。そんな寿町で情報発信を始めたのがさなぎ達だったのである。彼らはもともと情報発信を意図して活動しているわけではないが、彼らのユニークな活動の仕方が話題を呼び、また超高齢社会と向き合う活動が高齢化の進む日本社会の関心をひき、

寿町のメディアに取り上げられるようになった。こうしたメディアへの露出が外部からの人間が寿町を訪れるきっかけを作っている。実際、ヨコハマホステルヴィレッジ設立者 O 氏や、寿オルタナティブネットワーク設立者 K 氏は、さなぎ達が行っている寿町での取り組みをメディア通じて知り、そのことをきっかけに寿町を訪れ活動を始めたという経緯がある。次に、パイプ役の 2 つ目の役割として外部の人間と内部の人間の仲介をすることをあげたが、これも外部の人間が寿町に入ってくることでできた非常に重要な要因である。さまざまな立場の団体が 30~50 個も存在するといわれている寿町では、その複雑な関係の中に新規参入することは非常に難しい。長年寿町で活動してきた様々な立場の人々から信頼を得るには、仲介役が欠かせないのである。その仲介役を果たしたのが NPO 法人さなぎ達及び寿自治会事務局長 S 氏である。NPO 法人さなぎ達は、ヨコハマホステルヴィレッジ設立者 O 氏がドヤのオーナーと接触する機会を提供し、ヨコハマホステルヴィレッジの設立のきっかけを作った。意図的ではないが、彼らの活動は外部と内部をつなぐ仲介の役割を果たしている。NPO 法人さなぎ達そのものは、2001 年に設立された NPO だが、構成メンバーには 20 年以上寿町にかかわってきたメンバーもいる。長年地域密着型の活動を行ってきたさなぎ達のメンバーが外部からやってきた人々と内部の仲介役を担っているのである。寿自治会事務局長 S 氏は、寿オルタナティブネットワーク設立者 K 氏が団体設立当時に寿町で長年活動している団体と交渉する際の仲介役となった。寿町の地域活動の第一人者である S 氏が仲介役となったことで、他団体から信用を得やすかったと K 氏は振り返っている。こうした仲介役が存在したおかげで外部からの介入が起きたのである。

8章 寿町の変質

外部からの介入によってドヤのホステル化やアート活動の活発化が起きた結果、寿町で起きた地域の変質として以下の2点をあげる。

1つ目は、新たな層を横浜に呼び込むための装置としての機能を持つようになったことである。新たな層とは、宿泊をする観光客やアーティストである。横浜を訪れる観光客は、日帰り観光客の割合が多く、宿泊をする観光客が少ない傾向にある。寿町はドヤのホステル化によって、横浜に宿泊観光客を呼び込む新たな装置となっているのである。外国人バックパッカーや、多少狭くても料金が安く清潔で最低限のアメニティがそろったホステルに魅力を感じる日本人の若者などがヨコハマホステルヴィレッジを利用している。また、横浜で滞在・制作するアーティストも寿町を通じて増えている。寿オルタナティブネットワークが行っている寿合宿などのプロジェクトを通じて、数人のアーティストが寿町で滞在・制作をし始め、現在はアーティストのネットワークによって他地域から寿町にやってくるアーティストが増えている。こうした新たな層を横浜に呼び込む装置として寿町は機能するようになった。

2つ目は周辺地域への包摂である。宿泊施設のある地域として観光地の一部となったことや、規模の大きなアートイベントの会場の一つとなることで、周辺地域とは隔絶されたような寿町が周辺へ包摂されるようになってきている。例えば、ドヤがホステル化されたことで、寿町は観光客の泊まる宿泊施設のある地域として認識されるようになった。そのことを示す事実として、観光ガイドマップにも掲載されるようになったことがあげられる。具体例として、横浜が舞台となったスタジオジブリ映画「コクリコ坂から」(2011)のキャンペーンの一環として作成された横浜のガイドマップがある。このガイドマップには寿町の地名とヨコハマホステルヴィレッジが載っている。従来多くのガイドマップにはみなとみらいや横浜中華街、山手といった地域しか掲載されず、エリアがマップ内に入っていたとしても町名などが載ることはなかった。しかし、最近になって寿町はガイドマップにも掲載されるようになったのである。こうした例からわかるように、寿町は宿泊施設のある地域としてみなとみらいを中心とする観光地に包摂されるようになったといえる。また、近年寿町は、ヨコハマトリエンナーレや「関内外 OPEN！」³ など規模の大きいアートイベントの会場の一つとされるようになり、みなとみらいや黄金町と並ぶ、横浜のアート活動の主要な拠点の一つになりつつある。このように、周辺とは隔絶されたようなまちだった寿町は周辺地域に包摂され始めている。

³ 新港、馬車道、山下町、日本大通り、中華街、元町、野毛、伊勢佐木町、寿町などの複数のエリアで行われるアートイベント。アーティストによるオープンスタジオツアーや催し物を同時開催し、アーティストや住民、観光客の交流が図られる。



図 12 関内外 OPEN! 3 2011 マップ（関内外 OPEN! 3 公式 HP エリア紹介より）

図 12 は、2011 年に開催されたアートイベント「関内外 OPEN! 3」のマップである。寿町は石川町エリアに含まれ、みなとみらい地区や馬車道や日本大通りと同等にイベント会場の一つになっている。

寿町で起きた変質として以上 2 点をあげた。寿町では寄せ場のまちが福祉の街に変わっていった歴史的な変化が緩やかに続いているが、外部からの介入によって、こうした質的な変化が同時に生じるようになったのである。

では、この寿町の質的な変化は、まちの様相にどのように影響を及ぼしているのだろうか。次の図 13 の地図をもとに考察する。

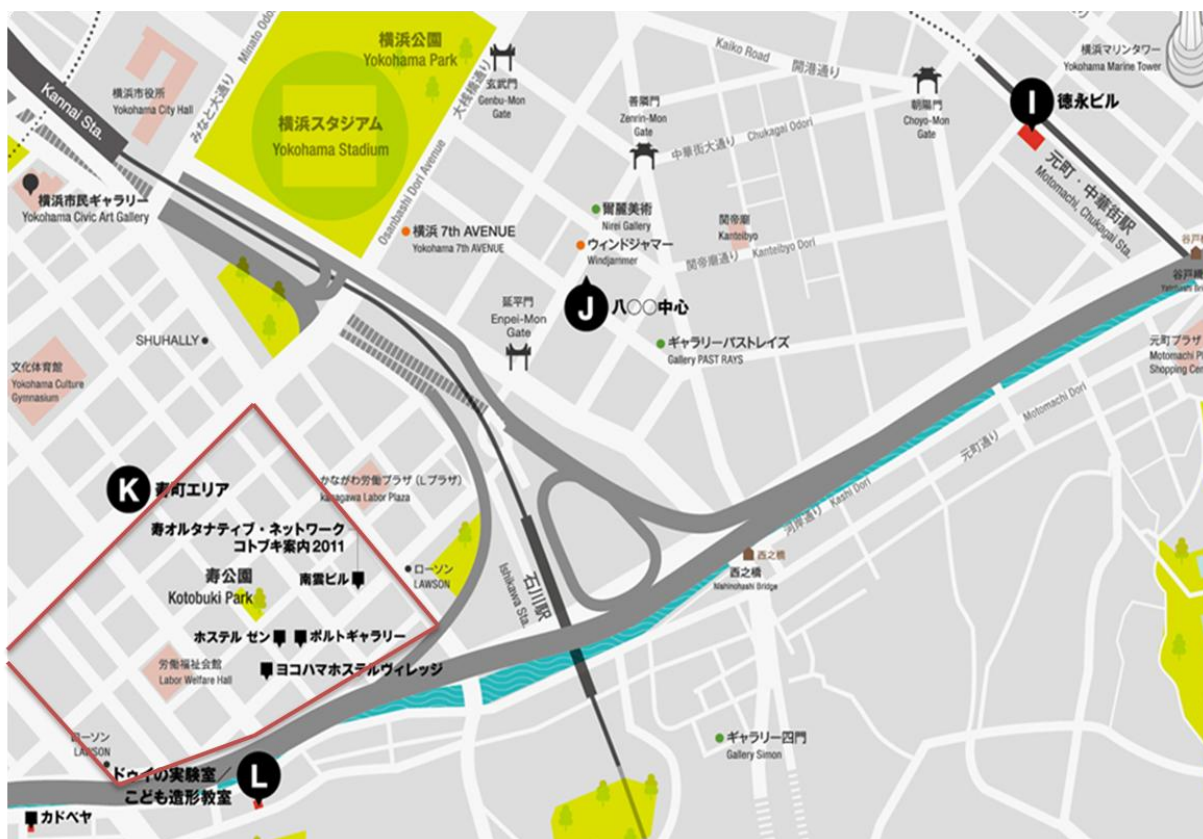


図 13 寿町のホステル化した簡易宿泊所の分布（関内外 OPEN！3 公式 HP エリア紹介より）

図 13 の地図は、もともと関内外 OPEN！3 公式 HP のエリア紹介で石川町エリアをクリックすると出てくるマップである。赤い枠の内側が寿町であり、ホステル化された簡易宿泊所の分布が分かる地図であったため引用した。寿町では現在ヨコハマホテルヴィレッジの他に、ホステルゼン、ホステルポルト（ポルトギャラリー）という簡易宿泊所がホステル化を行っている。3つのホステルはいずれも石川町寄りの通りに面しており、寿町の中心部と少し離れた場所に位置している。つまり、寿町の新しい機能すなわち新たな層を横浜に呼び込むための装置としての機能は、石川町という寿町にとって外部との結節点と近い部分から発達しているのである。実際、石川町に最も近い通りは、外観のきれいなホステルがあるために通りの雰囲気が明るく感じられ、歩きやすい。逆に、寿町の中心部にあたる寿労働福祉会館周辺は、路上に座り込んでいる住民が多かったり、外観があまりきれいでない建物が多かったりするため、薄暗い印象を受ける。このように、寿町の質的な変化は、外周に近い部分と中心部の雰囲気の違いを生じさせている。

9章 総括

9-1 まとめ

本稿の研究目的は、横浜市寿町で起こっている外部からの介入者による地域変容のメカニズムを解明し、寿町がどのように変質しているかを明らかにすることであった。すなわち、周辺地域とは隔絶されていた寿町がどのようなメカニズムで外部からの介入を受容したのか、かつて周辺地域に対して日雇労働力を供給する役割を担っていた寿町が現在周辺地域との関係をどのように変化させているのか、ということ进行分析することが目的だった。分析の結果を図式化すると以下の通りになる。

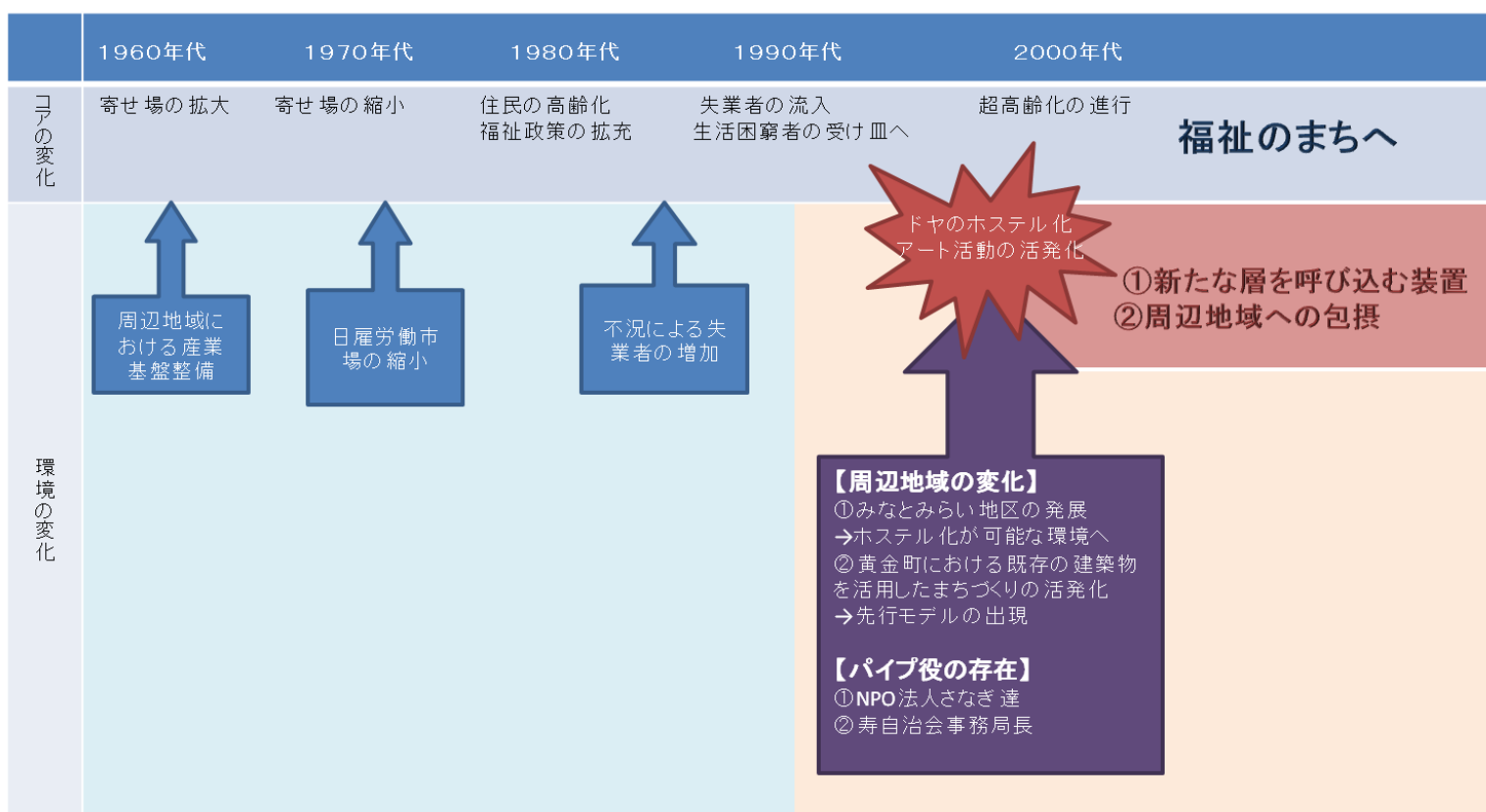


図 14 寿町の地域変容メカニズム 全体図

寿町には2種類の変容が起こっている。1つ目は、1970年代から続く福祉のまちへの変容である。図14ではコアの変化として示されている。日雇労働者の高齢化が進み福祉政策が拡充されてから寿町は福祉のまちとしての性格を強めてきた。1990年代には不況の影響

で失業者が寿町に流入し、寿町は貧困層の受け皿としての性格も強めることとなった。そして、現在寿町では超高齢化が進み、介護の必要な高齢者も増加し、福祉のまちとしての性格がさらに強まっている。住民の生活実態の変化やまちの社会構造の変容と深く関係している変化といえるため、図 14 で「コアの変化」と表記した。2 つ目の変化は、本稿の分析対象である外部の介入者による変化、すなわち「ドヤのホステル化」と「既存建築物を活用したアート活動の活発化」の 2 つの変化である。両者は外部からの介入者によるものであることや、住民の生活実態そのものとは関係の薄い変化であることから、前述した 1970 年代から続く福祉のまちへの変化とは異質なものである。本稿の研究目的はこの後者の変化のメカニズムとその結果を分析することであった。分析方法は次の通りである。バージェスの同心円理論の「遷移 (succession)」の概念より、このような変化が起きた背景に周辺地域の変化が関係していると考え、寿町と周辺地域の変化の関係性に着目した。そしてその関係性を分析するために、J・H・スチュワードの文化生態学より比較分析の手法を取り入れ、寿町と周辺地域の変化の関係性を抽出して寿町の地域変容のメカニズムを分析した。その結果、地域変容のメカニズムは次の通りであることがわかった。文化の核である「寄せ場」「ドヤ」と深く関係する周辺地域の変化と、地域の外部と内部を結ぶパイプ役の存在という 2 つの要素がそろったことで起きた。一つ目の要素であるの周辺地域とは、みなとみらい地区の発展、黄金町先行モデルの出現である。みなとみらい地区の発展によって観光客が増加し、ホステル化が可能な環境が整い、黄金町という先行モデルの出現によって既存建築物を活用したアート活動を促進するという取り組みが始まった。こうした変化によって、寿町は次のように変質しているということが分かった。1 つは、寿町が横浜に新たな層を呼び込む装置としての性質、すなわち宿泊する観光客とアーティストを呼び込む装置としての機能を持つようになったということである。2 つ目は、周囲とは隔絶していた寿町が周辺地域に包摂されつつあるということである。日雇労働者や失業者、低所得の高齢者の流入や福祉職の職員の出入りは以前からあったが、寄せ場全盛期時代から危険なイメージが定着していた寿町は横浜市民も観光客もあまり近づかない地域であった。その寿町が現在では観光地の一部として、アート活動の拠点の一つとして周辺地域に包摂され始めている。

以上より、次のようにまとめることができる。外部からやってきた O 氏によるドヤのホステル化は、みなとみらい地区の観光地としての発展によって寿町でホステル化の可能な環境が整ったこと、NPO 法人さなぎ達というパイプ役が存在したことで起きた。また、外部の人間による既存建築物を活用したアート活動は、周辺地域に既存建築物を活用したアート活動の先行モデルが存在したこと、寿町自治会事務局長というパイプ役が存在したことで開始され活発化した。

こうした外部からの介入は寿町に次のような 2 つの影響をもたらした。1 つは、新たな層を呼び込む装置としての機能の付与である。周辺地域への日雇労働力の供給という機能から新たな層を呼び込む装置としての機能を持つようになった。2 つ目は、周辺地域への包

撰である。周辺地域とは隔絶されていたような状態を脱し周辺地域への包摂が始まった。このようにして外部からの介入は寿町と周辺地域の関係性を徐々に変容させているということがわかった。

9-2 本研究の意義及び展望

本研究の意義として、地域の変容メカニズム及び質的な変化を解明する手法のひとつを提示したことがあげられる。本研究では、文化の核と深く関係するような周辺地域の変化の分析と、類似する地域との比較研究によって、地域の変容メカニズム及び質的な変化を解明することができた。全ての地域に応用できるわけではないが、大きな変容が起き何らかの課題に直面している地域において、現状を把握し的確な対応をするための一つの手法になると考えられる。本研究では、寿町が直面している課題までは踏み込んではいないが、なぜ地域に変化が起きたのか、地域がどのように変質しているかを分析し把握することは、直面する地域課題の根本的な要因を知ることにつながり、それによって適切な策を講じることができるだろう。本研究で提示した研究方法は地域社会の大きな変容に直面している地域において課題解決の一助になると期待している。

(39939 字)

【参考文献】

- R.E.パーク E.W.バージェス他著 大道安次郎 倉田和四生共訳『都市 人間生態学とコミュニティ論』鹿島研究所出版会 1972年
- J.H.スチュワード著 米山俊直 石田きぬ子訳『文化変化の理論 多系進化の方法論』弘文堂 1979年
- 高村直助著『都市横浜の半世紀—震災復興から高度成長まで』有隣堂 2006年
- 新居千秋都市建築設計編『横浜みなとみらい 21:創造実験都市』横浜みなとみらい 21 2002年
- 山本薫子著『横浜・寿町と外国人—グローバル化する大都市インナーエリア』福村出版 2008年
- 自治体問題研究所編『地域と自治体第4集—地域論・地域研究・地域調査』自治体研究社 1976年
- 横浜市健康福祉局寿地区対策担当『平成 19 年度 寿福祉プラザ相談室—業務の概要—』 2007年
- 友川綾子 橋本誠編『KOTOBUKI クリエイティブアクション 2008-2010』寿オルタナティブネットワーク 2011年
- Kogane-x 初黄日ノ出町環境浄化推進協議会 <http://kogane-x.koganecho.net/>
(2011.10 参照)
- 狩谷あゆみ編著『不埒な希望 ホームレス/寄せ場をめぐる社会学』松籟社 2006年
- 今川薫著『現代棄民考 山谷はいかにして形成されたか』田畑書店 1987年
- 黄金町エリアマネジメントセンター<http://www.koganecho.net/>
(2011.10 参照)
- 横浜高速鉄道株式会社「平成 20 年度経営分析報告書」
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/gaikaku/gaikakukansatsu/20kekka/20>
(2011.10 参照)
- 横浜市観光交流推進計画 改訂版」2007年 横浜市経済観光局交流推進課
横浜市統計書（平成元年—平成 22 年度）
関内外 OPEN!3 2011 公式 HP<http://kannaigaiopen.yafjp.org/>
(2011. 12 参照)
- 野本三吉著『野本三吉ノンフィクション選集 3 風の自叙伝—横浜・寿町の日雇労働者たち』1996年 新宿書房
季刊誌「横濱」30号 2010年秋号
朝日新聞 2010.11.5
ゼンリン地図横浜市
<http://www.its-mo.com/search/addr/%E7%A5%9E%E5%A5%88%E5%B7%9D%>

[E7%9C%8C%E6%A8%AA%E6%B5%9C%E5%B8%82%E8%A5%BF%E5%8C%BA%E3%81%BF%E3%81%AA%E3%81%A8%E3%81%BF%E3%82%89%E3%81%84/14103036](#)

(2011.12 参照)

財団法人横浜コンベンションビューロー「羽田国際化に伴う外国人来街者ニーズ把握調査報告書」2011年3月